

文部科学省 委託事業

新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)

第2年次実施報告書



令和7年3月



愛知県立惟信高等学校

第1章については、昨年度に引き続き本事業当初の構想、及び、目的・目標を掲載するが、昨年度の実施報告書にあった新設学科の名称を「グローバル探究科」から「未来探究科」へと変更し、学校設定教科についても「グローバル総合探究」から「学び探究」・「探究実践」へと変更している。

これらの変更は、デジタル社会の中で、地域社会とつながり、肌感覚ある交流を通して生徒自身の視野を広げ、自己と対峙して、未来を切り拓くための「実践力」と「自立型思考力」を養うことを目的とした本事業当初の構想を変更したものとは考えていない。むしろ、生徒たちが、これからの世界をより一層力強く生きていくための「未来を希求する」ものである。そういった観点で、第Ⅱ章以降の進捗状況、及び、実践活動報告等をご一読いただきたい。

愛知県立惟信高等学校
新学科開設準備員会 探究推進委員会執行部

目次

第Ⅰ章 事業の概要

- 1 本校の概要
 - 1－1 所在地
 - 1－2 設定課程と在籍生徒数
 - 1－3 本校の位置
 - 1－4 学校経営方針
- 2 事業構想（ビジュアル資料）
- 3 本事業の内容
 - 3－1 本事業の目的
 - 3－2 本事業の目標
 - 3－3 本事業の特色
- 4 実施計画
 - 4－1 3ケ年間の実施計画の概要
 - 4－2 令和5年度実施計画の概要
 - 4－3 令和6年度実施計画の概要
 - 4－4 令和7年度実施計画の概要
 - 4－5 令和6年度の実施計画の内容
- 5 管理体制
 - 5－1 管理機関における実施体制や事業の管理方法
 - 5－2 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方
- 6 実施体制
 - 6－1 校内の運営体制 《組織の改編》
 - 6－2 運営指導委員会
 - 6－3 コンソーシアム
 - 6－4 コーディネーター
- 7 成果普及のための仕組み

第Ⅱ章 研究開発実施状況報告

- 1 令和6年度の進捗状況
 - 1－1 探究推進委員会「執行部」と「リーダー会」の活動
 - 1－2 プロジェクトチームの活動
 - (1) Aチーム
 - (2) Bチーム
 - (3) Cチーム

- 1－3 新学科開設準備委員会
- 1－4 職員研修
- 1－5 運営指導委員会
- 1－6 コンソーシアム

2 活動実績

- 2－1 先進研究校視察
- 2－2 「総合的な探究の時間」の取組
- 2－3 成果発表会
- 2－4 「惟信マルシェ」

第Ⅲ章 事業検証と次年度に向けて

- 1 本年度の反省と課題（成果概要図）
- 2 事業運営体制の見直し
- 3 コーディネーター考察

<参考資料>

- ① 生徒作文（2編）
- ② チームB「学校設定教科」の教科目標
- ③ チームB「学校設定教科」の具体案（1年次）
- ④ チームC「授業改善に向けて」（1学期）
- ⑤ チームC「授業改善に向けて」（2学期）
- ⑥ チームC「授業改善に向けて」（3学期）
- ⑦ チームC「授業改善」振り返り（学年末）
- ⑧ 教員研修（研究協議）
- ⑨ 「総合的な探究の時間」1年生ワークシート（一例）
- ⑩ 「総合的な探究の時間」2年生ワークシート（一例）
- ⑪ 「総合的な探究の時間」3年生ワークシート（一例）
- ⑫ 掲載新聞記事

第 I 章 事業の概要

1 本校の概要

1-1 所在地

〒455-0823

愛知県名古屋市港区

惟信町二丁目 262 番地



© 2025 Microsoft

1-2 設定課程と在籍人数（令和 6 年 4 月 1 日現在）

学年	1 年	2 年	3 年	計
学級数	7	7	7	21
生徒数	281	273	256	810

1-3 本校の位置

本校は、大正 14 年（1925 年）に設立された愛知県惟信中学校を前身とし、令和 6 年度に創立 100 周年を迎え、卒業生はすでに 3 万人を超えている。第 2 次世界大戦、伊勢湾台風等、幾多の困難を乗り越え、地元の伝統校として多くの人材を輩出してきた。しかし、平成の時代に入り、世界は大きな転換期を迎えていたが、本校は時代の転換点を機敏に察知し、新たな視座を持って学校改革に臨むことができていなかった。「伝統に胡座」をかいていたがために、著しい結果を出し得ていない本校に取って代わろうとする近隣校の追撃を受けるに至り、それまでの地位を占めることが難しくなっていった。

そうした状況を打開すべく、平成 16 年度から「惟信再生」活動が始まった。職員の話し合いを重視したボトムアップによるその改革は、名古屋市内の伝統校においては成し得ない、職員の参画意識を高めることに成功した「学校改革」であった。これにより困難な時期を乗り越え、学校復活に向かうかと思われた矢先、総合学科高校が躍進する中で、新たな普通科高校の特色を打ち出す必要性に迫られた。そこで、平成 25 年度から 3 年間文部科学省指定事業「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」を経て、実践的な英語教育を実施するなど、模索の日々が続いていた。令和に入り、私立高校への就学支援金拡充等の影響から私立高校への人気が高まった。本校を含む名古屋市周辺地域における中下位の普通科高校では、学校存続への危機感を有するとともに、地域を支える公立普通科高校として存在感を示すことが急務となっている。このような中、本校は令和元年度から普通科高校としての特色を打ち出すべく、「グローバルリーダーの育成」を目標に掲げ、令和 2 年度文部科学省「地域との協働による高等学校改革推進事業（グローバル型）」アソシエイト校として採択され、普通科高校の「特色化」への準備を進めた。また、愛知県教育委員会事業「地域の未来を創る人材育成事業（道德教育推進事業）」の実践校として、地域との協働による「特色化」を図ろうとしていた。しかし、新型コロナウイルス感染症による全国一斉の臨時休業に見舞われ、その後のコロナ禍においては限られた範囲での地域貢献活動とならざるを得なかった。そうした中でも、平成 30 年度から継続していたオーストラリアへの海外研修旅行（令和 2・3 年度は中止）を、令和 4 年度にはアメリカ合衆国へと切り替えて姉妹校提携を目指し、令和 6 年 3 月末にはフィリピン研修旅行を実施した。令和 7 年

度からは諸般の事情を鑑み、海外研修旅行をシンガポール研修へと一本化する。

本校は、人口が集中し、多文化共生がすすむ都市部にあるいわゆる“普通”の公立普通科高校であるが、日本の貿易拠点である名古屋港に臨み、増加する外国籍の人々への対応、海拔0メートル地帯における防災、高齢者へのサポート等、地域が抱える課題は山積している。今後ますます進むであろう外国人労働者の受け入れ、30年後までの発生確率が70%といわれる南海トラフ地震、隣人の顔すら知らずに過ごしがちな都市部において、公立普通科高校で学ぶ生徒が、国際的な広い視野を持って、地域に新しい価値を創造し、地域に貢献することができれば、生徒自身の「自己有用性」を高めることにつながると考える。生徒自身が言葉の壁を乗り越えて多文化共生社会の一員となり、未来や自己を見つめることで「自立型思考力」を獲得し、都市部での課題を見つけ出し、課題解決に向けて試行錯誤する探究活動を通じて、新しい価値を創造し、地域社会に貢献するという都市型公立普通科高校での汎用的・普遍的な探究活動に挑戦する。

都市の中では埋没しかねない中位程度の“普通”の普通科高校で改革が進むことの意義は大きい。特別な産業との結びつきによる地域協働や過疎地域での地域協働とは異なる汎用性の高い公立普通科高校での教育改革を目指している。

1－4 学校経営方針

【校訓】

「高い知性」 「豊かな心」 「粘り強い体力」

【スクールミッション】

- 主体的に学ぶ態度を身につけ、国際的な視野と国際社会に生きる人間としての自覚をもった生徒の育成を目指す学校
- 他者との協調を大切にする豊かな人間性と社会性を備え、地域のリーダーとして社会の発展に寄与しようとする自立した生徒の育成を目指す学校

【スクールポリシー】（愛知県立惟信高等学校 「三つの方針」）

- 1 目指す生徒像（育成を目指す資質・能力に関する方針）
 - ア 高い志を持ち、社会に貢献することができる人
 - イ 幅広い視野を持って考えることができる人
 - ウ 自分も周りの人も大切にできる人
 - エ ものごとに粘り強く取り組むことができる人
- 2 本校における学び（教育課程の編成及び実施に関する方針）
 - ア 生徒が主体的に進路実現を目指すことができる教育課程
 - イ 生徒が活躍できる教育活動
 - ウ 生徒一人ひとりを大切にする指導と支援
- 3 入学を期待する生徒像（入学者の受入れに関する方針）
 - ア 地域社会への貢献や国際的な活動に関心を抱いている人
 - イ 他者に思いやりを持って接することができる人
 - ウ 粘り強く学び続けるとともに新しいことにも挑戦したい人

2 事業構想

※ 計画時の新学科名「グローバル探究科」から「未来探究科」へと名称変更を予定している。（以下の名称「グローバル探究科」は、計画段階のものである。）



3 本事業の内容

3-1 本事業の目的

本校は、スクール・ポリシー「目指す生徒像（育成を目指す資質・能力に関する方針）」の第一に、「高い志をもち、社会に貢献することができる人」を挙げ、地域社会学科での学びを通して、多様性のある地域共生社会で新しい価値を創造し、「高い志」をもって地域社会に貢献できるグローバル人材を育成することを目的・目標としている。様々な情報が飛び交う時代においては、多様な人々の意見を参考にしながら、国際的な広い視野を持って自分の考えを深める「自立型思考力」を養い、物事の本質を見る目と事象を根源的に捉える力が必要となる。

そうした「自立型思考力」を育成するためには、「空間軸」「時間軸」「人間軸」といった3つの軸をもって地域の課題解決に向けた探究活動に取り組むことが必要である。「空間軸」とは、自分と地域・世界の関係性を築き、最終的には故郷（地元・地域）へと帰って来るもの。「時間軸」とは、過去から未来へとつながり、過去との対話から未来を見つめ、将来を展望するもの。「人間軸」とは、人とのつながりの中から仲間や地域を意識し、人との触れ合いの中から仲間や地域の中での自己を見つめるものである。この3つの軸をもって地域の課題解決に向けた探究活動に取り組むことで、地域社会とつながり、未来を見据え、自己と対峙して、集団における己を知ることとなる。外国人を含む多様な地域の人々との肌感覚のある交流は、生徒自身の視野を広げるだけでなく、生徒たちが活動する地域と世界のつながりを知るきっかけになる。この学びを通して、「実践力」と「自立型思考力」の2つの資質・能力を育み、多様性のある地域共生社会で新しい価値を創造し、地域社会に貢献できるグローバル人材を育成することが新学科設置の目的である。

「実践力」の育成については、現状の多様性のある地域社会、特に若者に蔓延するネット空間では得ることのできないリアルな実践、肌感覚の学びを体験することで、目前的課題解決に向けて粘り強く向き合う「実践力」を育みたい。

「自立型思考力」の育成については、自分で選択した地域の課題の解決に向けて、「空間軸」「時間軸」「人間軸」の3つの軸をもって探究活動（実践）に取り組むことで、外国人を含む多様な地域の方々からの意見を参考にしながら、国際的な広い視野を持って自分の考えを自ら深めることができる「自立型思考力」を育成したい。

地域に根ざした探究活動（発見－交流－貢献）を実践することで、「実践力」と「自立型思考力」を育み、多様性のある地域共生社会で、新しい価値を創造し、地域社会に貢献できるグローバル人材を育成する。

3-2 本事業の目標

本校においては、基礎的・基本的な知識及び技能を十分に修得することなく入学する生徒や学習に対するコンプレックスを持ち、自己肯定感の低い生徒も見られ、不登校となる生徒も少なからずいる。一方で、本校には純朴な生徒たちが学校行事や地域のボランティア活動など校外活動等に熱心に取り組んできた土壤がある。こうした本校の現状と特性を鑑み、共通教科の授業において、基本事項をより本質的かつ興味深く学び直し、本来の学びの意義を感じられるようにするとともに、多様化する地域社会での探究活動を通して、生徒の「実践力」と「自立型思考

力」を育て、「高い志」をもって、多文化共生社会の未来を拓くグローバル人材の育成を目指した普通科高校改革を行う必要があると考える。自己肯定感の低い生徒においても、地域社会に見守られながら探究活動に取り組み続ける中で、「高い志」が醸成され则认为る。

令和2年度からの文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」アソシエイト校、愛知県教育委員会「地域の未来を創る人材育成事業」実践校としての取組から得られた、生徒の学びを推進するのに必要不可欠な地域との良好な関係を活かし、生徒の主体性を育むために、生徒が学ぶ内容が学校側の用意した研究対象領域に制限されることのないよう、地域との関係をより強固かつ柔軟なものとして、生徒が自ら作り上げる主体的活動を尊重できる体制を整え、令和7年度の新学科開設に結びつけていきたい。

既設の普通科・新設の未来探究科の生徒が共に学ぶ「総合的な探究の時間」を通して、両者が互いに刺激し、影響を与え合うことで、普通科の生徒にも「実践力」と「自立型思考力」が普及し、生徒全員が独自の視点を持って、力強く地域社会で活躍するグローバル人材となることが期待できる。生き生きと地域で探究活動する生徒自身が魅力の普通科高校となることを目標として掲げる。

この取組が、本校の生徒の成長につながり、本校の復活、引いては日本の都市型普通科高校の改革に寄与したい。

3-3 本事業の特色

【取組の前提】

取組の前提として、本年度から実施される「総合的な探究の時間」の内容を新学科の取組につなげていく。新学科設置後は、「総合的な探究の時間」の取組を基礎とし、その上に学校設定教科「学び探究」・「実践探究」を発展的に展開する2階建て構成とする。新学科の設立は普通科高校改革を視野に入れたものであり、「総合的な探究の時間」の授業実践の研鑽により、新学科で実施される学校設定教科が普通科の「授業」に還元されるものとなる。

【教育方法の特色 魅力ある教育を構築する2点の支柱】

1. 3つの軸「空間軸」「時間軸」「人間軸」をもって、教員誘導でなく主体的に探究活動に取り組む・・・生徒主導とする。3つの軸を、生徒の活動の立案や実践時の指針及び自己評価の基準とすることで、課題を自ら見つけ試行錯誤を重ねて活動することができる。
2. 地域に根差した探究活動をベースとし、その実践を通して幅広い視野を獲得する・・・ネット空間では得ることのできないリアルな実践、肌感覚の学びが体験できるよう、地域に根差した課題をテーマとした探究活動を実践することで「実践力」を育てる。

上の2点の支柱を基とした教育活動の内容

前提より「総合的な探究の時間」の取組とつなげ、下記のような取組を考えた（特に、新学科の指定教科の取組は《指定》と付記）。

- (1) **個人テーマ研究** 地域・国際交流をベースとして「文化、歴史、政治、教育、防災、福祉、技術、環境、産業、人権」の10個のキーワードと関連した事柄を一人一人の生徒がテーマとし、個人研究、グループ発表、意見交換、地域の方の協力等を経て、継続的に研究する。
- (2) **原点授業**《指定》 交流活動やボランティアに興味を持つ本校の生徒は一般教科を軽視する面が窺える。そこで小中学校での既習教科の基本事項をより本質的にまた興味をもって学び直すことで本来の学びの意義を感じさせ、高校での学習に繋げる授業を工夫する。この取組が普通科の授業にも反映させられるように学校全体で共有する。
- (3) **地域自慢・名物発掘** 個人研究および地域探究活動の第一歩として、自分の住む町の誇れる名物（人、産業、名所、名店、歴史的価値、環境）を1年生が個人で探し、地元の方にインタビュー協力を得て調査報告する。特に、ラムサール条約登録地である藤前干潟の保全に着目し、地域と世界を関連付ける素地とする。また、学校内でのクラス発表や学年発表の機会とする。
- (4) **惟信マルシェ** 本校伝統の文化祭「柊祭」の財産を活かし、地元と協力し地元拡大マルシェ（地元名物発表コーナー、地元文芸発表、地元産業販売屋台）を地域住民、近隣中学生を招いて開催する。「総合的な探究の時間」の活動として、生徒「総探委員会」の主体的な取組として、計画・準備・実施を新学科が中心となり運営する。
- (5) **仮想リアルエントリーシート作成**《指定》 地元（県内）産業、企業、公共機関等で魅力を感じ、就職したいと思う対象を探し、調査した上で、採用されるべく、仮エントリーシートを作成。自分が卒業後、希望の進路にすすみ、そこで理想的に成長した自分を想定することで、未来探究の実践とする。

4 実施計画

4－1 3年間の実施計画の概要

新学科の中心となる取組は生徒の探究活動である。探究活動は普通科の生徒とともに学ぶ「総合的な探究の時間」を土台とし、学校設定教科「学び探究」・「探究実践」で探究活動の高度化・深化に取り組む。新学科生徒と普通科生徒の連携が新学科の学習効果、さらには学校全体の活性化を生み、普通科改革を推進する。従って、実施計画では「新学科の設計」とともに、土台となる「総合的な探究の時間」の再構築が必須事項となる。

- ・「学び探究」・「探究実践」の設計（探究活動の高度化・深化）〔2 F〕
- ・「総合的な探究の時間」の先行実施（概案から詳細案までを再構築）〔1 F〕

4－2 令和5年度実施計画の概要

【「新学科」設立に向けた2階建て構成の大枠策定と「総合的な探究の時間」の先行実施】

- 「グローバル探究科」設立への組織作り、取組内容の概案の作成
 - ・「図書探究部」の役割分担及び校内組織の組成
 - ・コーディネーターを中心とした関係機関への依頼（協力体制の構築）
 - ・全職員対象の校内研修による実施計画への理解
 - ・探究活動ワークシート作成
 - ・「アクティブ・ラーニング」ルームの設置
 - ・コンソーシアムの再構築と地域への協力依頼
 - ・生徒の探究活動を推進するための教員による地域の事前調査と研究、意見交換
- 「総合的な探究の時間」の先行実施（概案及び実験的試行を含む詳細案の再構築）
 - ・本校生の主体的活動の可能性を探り、職員で取組の構図と意義を共有
 - ・特色選抜入学生の活動状況を参考にした新学科の学びの想定
 - ・図書探究部とコーディネーターによる先行実施の準備
 - ・2学期より「総合的な探究の時間」の先行実施（試行実施）
 - ・原点授業の公開模範授業の実施と研究（「総合的な探究の時間」と共通科目との連動に関する研究）
 - ・学校設定教科の内容検討
 - ・カリキュラム案作成

4－3 令和6年度実施計画の概要

【「新学科」設立への具体的な準備と総探の試行的年間実施】

- 「総合的な探究の時間」年間活動の試行実施（連動する新学科の活動を想定）
 - ・探究活動ワークシート作成
 - ・生徒研究成果発表会の実施（地域への発表）
 - ・地域住民の出前講座、地域と連携したフィールドワーク等の先行実施
 - ・年間計画の見直しと総括的反省
 - ・運営指導委員会の開催（活動報告・「未来探究科」設置への進捗状況説明）

○「未来探究科」の詳細計画・準備

- ・コーディネーターと探究推進委員会による各活動の日程と内容の策定
- ・学校設定教科の内容決定
- ・カリキュラム案の決定

4-4 令和7年度実施計画の概要

【「新学科」開設、普通科と連動した活動の開始】

○「総合的な探究の時間」の全校実施と「未来探究科」の開設

- ・新学科の開設及び学校設定教科の開講
- ・研究指定終了後の自走に向けた体制整備（コンソーシアムの持続）
- ・総括的反省（改善点を更新）
- ・事業3年間の報告書の作成

4-5 令和6年度の計画の内容

	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・学校設定教科の検討協議 ・「授業改善」の検討	・各関係機関への挨拶（組織担当改編）
5月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・学校設定教科の検討協議 ・「授業改善」の検討協議 ・新設学科の教育課程検討意見集約	・第1回コンソーシアム定例会議 ・教員研修
6月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・学校設定教科の検討協議 ・「授業改善」の検討協議 ・第1回運営指導委員会	・教員研修 ・主任による中学校訪問
7月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・学校設定教科の検討協議 ・「授業改善」の検討協議	・近隣中学校と地域住民への説明会 ・広報活動
8月	・学校設定教科の検討協議まとめ ・「授業改善」の検討協議まとめ ・フィールドワーク（1・2学年） ・外部講師による講義	・第1回中学生体験入学 ・第2回コンソーシアム定例会議 ・教員研修

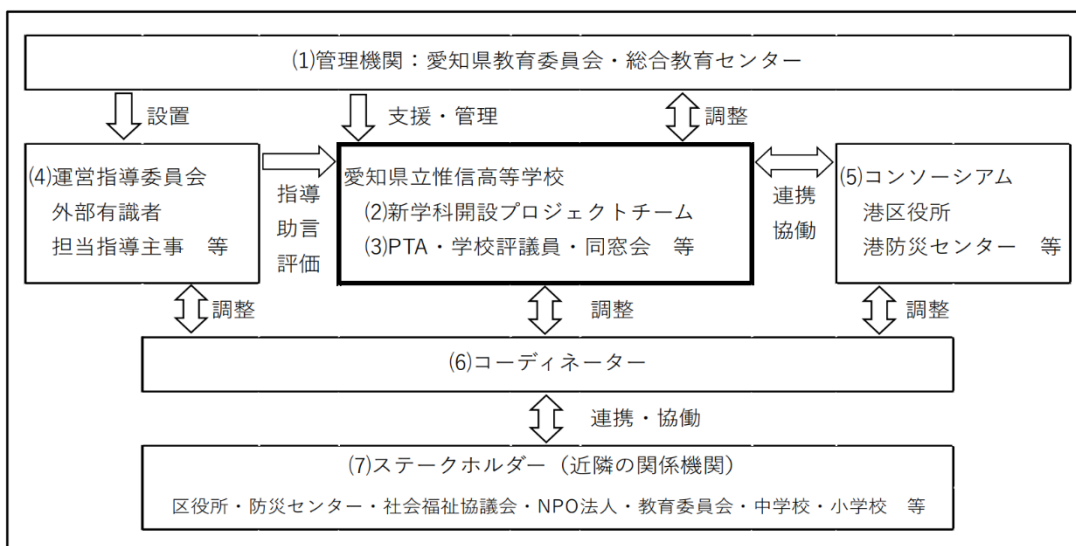
9 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・学校設定教科の検討協議(中間発表) ・「授業改善」の検討協議(中間発表)	・学校祭への中学生、地元住民の招待 ・主任による中学校訪問
1 0 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・第2回運営指導委員会	・第2回中学生体験入学 ・教員研修
1 1 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行	(創立100周年記念行事)
1 2 月	・学校設定教科の年間計画の策定 ・「授業改善」の(中間発表)	・教員研修
1 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行	・第3回コンソーシアム会議
2 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行 ・「総合的な探究の時間」成果発表会 ・第3回運営指導委員会	・新学科開設への確認
3 月	・「総合的な探究の時間」全学年試行	・「惟信 マルシェ」

5 管理体制

5-1 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施体制】

下図のとおり実施体制を構築する。



【事業管理方法】

次の方法により事業を管理する。

(1) 管理機関

愛知県教育委員会及び総合教育センターを管理機関とする。本県の普通科改革の方策や他校の実践事例を共有し、運営指導委員会を通じて定期的に指導・助言する。

(2) 新学科開設プロジェクトチーム

愛知県立惟信高等学校に本プロジェクトチームを設置し、「地域社会学科」への改編の実施主体とする。

(3) PTA・学校評議員・同窓会

「地域社会学科」への改編に向け、既存のPTA、学校評議員及び同窓会からの意見を、特色・魅力あるカリキュラム及び教育方法の開発に取り入れる。

(4) 運営指導委員会

外部有識者及び愛知県教育委員会担当指導主事等を構成員とする。年に3回開催し、専門的見地から指導、助言、評価を行う。

(5) コンソーシアム

「地域との協働による高等学校教育改革事業（グローバル型）」で連携を呼びかけた機関を母体とする。年に3回の定例会議を開催し、連携・協働体制を評価し、改善等に向けた協議を行う。

(6) コーディネーター

コーディネーターは全体を掌握し、必要に応じて調整を行い、学校と地域のステークホルダーによる連携・協働した教育活動の継続に努める。

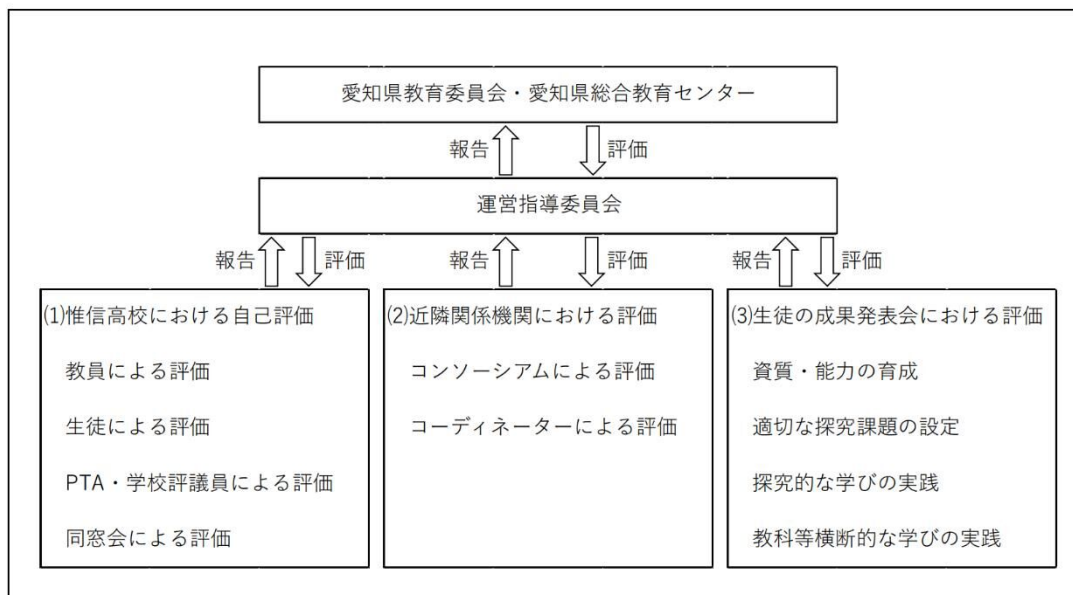
(7) ステークホルダー

「地域との協働による高等学校教育改革事業（グローバル型）」で連携を呼びかけた、近隣の関係機関等をステークホルダーとする。

5-2 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業全体の成果検証及び評価のための体制】

下図のとおり事業全体の成果検証及び評価のための体制を構築する。



【事業全体の成果検証及び評価の考え方】

次の3つの方策において、定量的・定性的調査を行うことで、事業全体の成果検証、評価を行う。

(1) 惟信高校における自己評価

惟信高校において、教員、生徒、PTA、学校評議員及び同窓会を対象としたアンケートによる評価等を基に、本事業の取組について自己評価をまとめる。運営指導委員会において、惟信高校の自己評価の妥当性について検証する。

(2) 近隣関係機関における評価

コンソーシアム構成員及びコーディネーターを対象とした生徒の資質・能力の伸長についてのアンケートによる評価等を実施することで、近隣関係機関からの評価とする。運営指導委員会において、近隣関係機関における評価の妥当性について検証する。

(3) 生徒の成果発表会における評価

年1回開催する生徒の成果発表会について、生徒、教員、コンソーシアム構成員、コーディネーター、地域住民及び愛知県教育委員会等が参加し、生徒の学びの深まりについて、次のような観点で評価する。評価結果等については、ウェブページに掲載する。

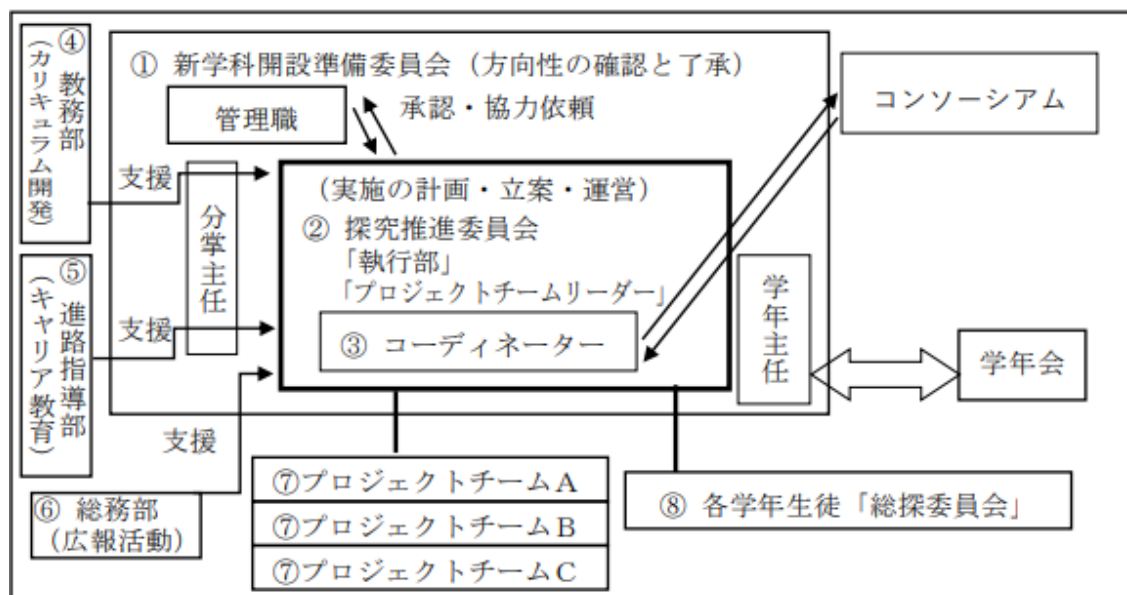
- ・生徒の研究が、資質・能力の育成に資する内容になっているか
- ・生徒の探究課題の設定が適切な内容になっているか
- ・生徒による探究的な学びが実践されているか
- ・生徒による教科横断的な学びが実践されているか

(4) 管理機関における事業全体の成果検証及び評価

(1)、(2)及び(3)の3つの方策を踏まえた運営指導委員会からの検証報告を受け、事業全体の成果検証、評価を行い、改善の指針を示す。

6 実施体制

6-1 校内の運営体制 <組織の改編>



① 新学科開設準備委員会

管理職、運営委員会メンバー、探究推進委員会メンバー、コーディネーターで組織された委員会であり、探究推進委員会の計画・立案の方向性を確認・了承するとともに、新学科を開設し、グローバル人材の育成と生徒の自信の創出に向けた教育を推進する。

② 探究推進委員会

「執行部」を置き、執行部長のもと、コーディネーター、プロジェクトチームリーダーとともに新学科の方向性を企画・立案する新学科開設準備の中心となるチーム。

③ コーディネーター

「総合的な探究の時間」・「グローバル探究科」の活動の3年間の取組の概要を計画・立案し、具体的な実践活動をマネジメントする。特に、地域の方々との生徒交流の方法、円滑な実践を支援する橋渡しの役割の中心を担う。

④ 教務部

探究推進委員会での運営方針を受け、グローバル探究科、及び、相乗効果の見込まれる普通科のカリキュラム開発を進める。

⑤ 進路指導部

キャリア教育を担う中心分掌として、探究推進委員会での運営方針を受け、グローバル探究科・普通科の探究活動をととしたキャリア教育を支援する。

⑥ 総務部

探究推進委員会とともに、広報活動を支援する。

⑦ プロジェクトチームA・B・C

探究推進委員会の方針を受け、Aチームは学年主任とともに「総合的な探究の時間」の立案・運営を行う。Bチームは次年度に向けて、学校設定教科のカリキュラム開発を行う。Cチームは「授業改善」のための検討と取組の実践を行う。

⑧ 生徒「総探委員会」

「総合的な探究の時間」実践の生徒リーダーとして、運営の一端を担う。

6-2 運営指導委員会

所属	氏名	主な実績
愛知淑徳大学	加藤 智 (運営指導委員長)	文部科学省「総合的な探究の時間」調査官
高木学区区政協力委員長	工藤 清	長く地元町内会をまとめ、幅広く小・中学校との関係を構築
地元中学校(宝神中学校長)	村瀬 圭二	学校評議員を務め、本校の現状への理解が深い
矢野建設株式会社	矢野 雄嗣	地元企業社長、地元密着型の事業展開とともに世界に目を向けたグローバル企業
フィリピン民族舞踏団「母なる大地の子どもたち」理事 社会福祉法人恵育会評議員 椋山女学園大学・椋山人間学研究センター環境と人間プロジェクト研究員 株式会社ミライクエスト専務取締役	上田 敏博	青年海外協力隊員を経て、国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」の業務を通じてフィリピンの復興・開発支援に携わる。1998年よりフィリピン政府登録NGONGO「ライズエイジア」を設立、20年間フィリピンに在住し、2013年から2016年までJICA中部に勤務。現在もフィリピン支援プロジェクトに参加し、多文化共生社会推進のために活動する。
愛知県教育委員会	加納 澄江	高等学校教育課 課長

○ 運営指導委員会が取り組む内容

地域に根ざした事業主、文部科学省調査官も兼務する大学教授、国際経験豊かな公益社団法人職員、区政協力委員長等によって組織し、次の3点について、それぞれの専門的知見から学校に対して指導・助言を行う。また、事業の成果についての検証と評価を行い、次年度への課題を提示する。

- (1) 「総合的な探究の時間」及び「学校設定教科」における学びの充実
- (2) カリキュラム開発の進捗
- (3) 教育活動と地域社会学科の目的・目標の整合性

6-3 コンソーシアム

所属	氏名	主な実績
名古屋市港区役所	吉田 尚司	地域力推進課課長、地域推進の司令塔
名古屋市港防災センター	大場 玲子	同センター長
名古屋市港区社会福祉協議会	平野 和彦	同所長、同事務局長
地元町内会長、高木学区区政協力委員長	工藤 清	長く地元町内会をまとめ、地元の様子を的確に把握している
地元企業	松本 崇義	松栄運輸株式会社代表取締役社長、名古屋市青年会議所理事
NPO 法人 藤前干潟を守る会	亀井 浩次	同理事長
愛知県立惟信高等学校同窓会	大口 雅章	長年にわたり同窓会長として本校を支える

○ 連携・協力体制の構築の考え方

本校における本学科設置による取組の中心は、「総合的な探究の時間」を教育課程の軸とした教育活動の実践であり、生徒が地元地域を肌感覚で感じ、地域社会の方々との交流を通して、「実践力」と「自立型思考力」を育成するところにある。従って、全校で実施される「総合的な探究の時間」については、生徒の主体的な行動に重点を置き、コーディネーターを中心に、区役所や警察署といった大きな枠での協力体制を依頼するに止める。その上で、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」で連携を図り、協働した関係機関である防災・福祉、地元企業・地元町内会、地元環境団体との連携によるコンソーシアムを、生徒の探究活動をさらに推進する可能性のある関係機関を加えて再構築して、より多くの生徒の学びを支援する体制を整備していく。

○ 連携・協力体制の構築の方法

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」で構築したコンソーシアムの母体とし、年3回の定例会議を開催することで、具体的な連携・協力体制を再構築する。

定例会議では、当該年度を含めた今後の行事予定を相互に確認し、連携・協力が可能な地域活動の内容を提案し、実施に向けた計画を立てる。計画の際には、その活動が地域社会学科の設置目的やカリキュラムの目標に沿っており、地域貢献に繋がる計画であることを、運営指導委員会の助言を受けながら確認する。なお、第3回の定例会議では、年度内の活動の評価・反省点等を確認するとともに、次年度に向けた改善点を整理していく。

6-4 コーディネーター

梶本 郁二（個人事業主）

- 主な実績 1999 年度、愛知県立五条高等学校が「総合的な学習の時間」の研究指定校として先行実施した際、実践の中心として企画運営を担当。内容は「21 世紀のプランナー」と題し、生徒が個人またはチームで、興味あるテーマを社会人の協力を得て研究発表する実践等。

2014 年度、愛知県立名古屋西高等学校進路指導主事として、生徒の進路探究・成長支援として、「総合的な学習の時間」の再構築を提案し、1 年生の年間授業「360 人の主張」を企画立案し、総合学習部の主任を兼任し実践運営。以降、現在まで実践は継続しているが、毎年協力していただく社会の個人-企業団体は 70 社を超えている。

- コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

（勤務形態）

管理機関である愛知県教育委員会が、当該者を会計年度任用職員として任用する。週 3 日（計 15 時間）出勤して図書探究部にて会議を行うとともに、「総合的な探究の時間」で協働する。また、週 2 日は在宅でワークシート作成等の業務を行うとともに、オンラインで支援する。その他、外部協力者との訪問打ち合わせなどに従事し、合計週 29 時間の勤務を行う。

（取り組む内容）

- ① 「総合的な探究の時間」の活動の 3 年間の取組の概要を、図書探究部とともに計画・立案、具体的な実践活動を支援する。
- ② 地域探究学科の学校設定教科の計画・立案、実施に取り組む。
- ③ 地域の方々との生徒交流の方法、円滑な実践を支援する橋渡しの役割の中心を担う。
- ④ 実施日程や活動内容の詳細を連携機関・大学と調整し、学校と共有することで、年間指導計画の作成を支援する。
- ⑤ 連携機関・大学からの要望・助言と学校からの要望を調整し、円滑な実施に寄与する。
- ⑥ 地域の特色を活かした教育活動をより充実させるために、新たな連携機関・大学との調整や協議を図る。
- ⑦ 小中学校で学んだ各教科の基本事項を本質的かつ興味深く学ぶことのできる授業方法を模索し、本来の学びの意義を感じさせられるよう、「原点授業」の開発に対する助言指導を行う。

7 成果普及のための仕組み

次の方法により、本事業の成果の周知を図る。

(1) 「総合的な探究の時間」の生徒研究成果発表会の開催

地域の方々や地域関連機関を招いて、「総合的な探究の時間」の生徒研究成果発表会を開催し、成果の発信をする。

(2) 「惟信マルシェ」の開催

地元と協力して開催する「惟信マルシェ」には、文化祭同様、地域住民及び地元中学生を中心に本校の活動を実際に見てもらうことで、本校の取組を発信し、アピールする。

(3) Web ページや新聞社・地元ホームタウン誌等での公開

「総合的な探究の時間」の成果発表会や「惟信マルシェ」の様子を業者に依頼して撮影編集し、Web ページ上に公開すると共に、地元新聞社への掲載を依頼する。

(4) 地域活動報告

校内向けの「地域活動報告」を作成し、地域社会学科に在籍していない生徒やその保護者にも活動の成果を周知する。

(5) 他校との連携

県内で同様の研究を行う学校と連携し、相互に実践報告を行う機会を持つことで互いに刺激し合い、相互に向上する。

第Ⅱ章 研究開発実施状況報告

1 令和6年度の進捗状況

1-1 探究推進委員会「執行部」と「リーダー会」の活動

「第Ⅰ章 事業の概要『6-1 校内の運営体制 <組織の改編>』」に示すとおり、「図書探究部」を中心に検討してきた「総合的な探究の時間」の計画・立案、及び、「学校設定教科の策定」を「探究推進委員会」が担うこととした。「探究推進委員会」（通称「リーダー会」）には、「執行部」と「プロジェクトチームA・B・C」のリーダー3名、合計6名で構成され、新学科の方向性を企画・立案する新学科開設準備の中心となることとした。この改編は前年度の課題「全教員による事業達成のための意義・目的の共有」、並びに、「新設学科の学校設定教科の具体的な内容の更なる検討」を踏まえたものである。「執行部」は毎週1回、授業時間内に定例会議が設定され、必要がある場合には適宜行われた。また、その方針を協議する「探究推進委員会」も週1回、授業時間内に設けられ、以下のように活動した。

【探究推進委員会（リーダー会）】

- 第1回（4月16日）
 - ・『「未来探究科」が目指すところ』（「白紙からの Vision Note」）について
 - ・各チームの役割確認について
- 第2回（4月23日）
 - ・今後の展望「白紙からの Vision Note」について
- 第3回（4月30日）
 - ・今後の展望について
 - ・学校案内、及び、新学科リーフレットの作成について
- 第4回（5月7日）
 - ・教育課程について
 - ・地域探究の意義と各チームの1年間の取組目標の確認について
- 第5回（5月21日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・教育課程について
- 第6回（5月28日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・新学科リーフレット案の検討
- 第7回（6月4日）
 - ・各チームの進捗状況について
- 第8回（6月11日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・第2回新学科開設準備委員会について
- 第9回（7月2日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・令和7年度特色選抜実施要項について

- ・カリキュラム変更について
- ・7月24日職員研修について
- ・惟信マルシェの日程について
- 第10回（7月9日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・カリキュラム変更について
 - ・惟信マルシェの日程について
 - ・職員研修について
- 第11回（7月16日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・第3回新学科開設準備委員会、第2回コンソーシアム定例会議について
 - ・職員研修について
- 第12回（9月3日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・HPでの情報発信について
 - ・第4回新学科開設準備委員会について
 - ・「成果発表会」、及び、「惟信マルシェ」実施要項について
- 第13回（9月17日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・指定校発表会について
 - ・第2回、第3回中学生体験入学について
- 第14回（10月1日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・講師による授業研修について
 - ・第2回、第3回中学生体験入学について
- 第15回（10月15日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・コーディネーターによるモデル授業について
- 第16回（10月22日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・第1回中学生進学希望調査結果を受けた今後のPR方法について
- 第17回（10月29日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・第1回中学生進学希望調査結果を受けた今後のPR方法について
- 第18回（11月5日）
 - ・各チームの進捗状況と各チームの目標について
- 第19回（11月12日）
 - ・各チームの進捗状況について
 - ・来年度の組織編成について
 - ・今後のPR方法について

- 第 20 回（11 月 19 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
- 第 21 回（12 月 3 日）
 - ・ 各チームの進捗状況と業務内容について
 - ・ 職員研修について
- 第 22 回（12 月 10 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 職員会議への中間報告について
 - ・ 来年度の組織編成について
 - ・ 最終協議に向けて
- 第 23 回（12 月 17 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 学校設定教科の評価について
 - ・ 学校設定教科「学び探究」の「原点授業」について
 - ・ 探究推進委員会の振り返りについて
 - ・ 最終協議に向けて
- 第 24 回（1 月 7 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 中学生第 2 回進学希望調査結果について
 - ・ 学校設定教科の評価について
- 第 25 回（1 月 14 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 来年度の行事計画について
- 第 26 回（1 月 21 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 第 6 回新学科開設準備委員会、第 3 回コンソーシアム定例会議について
 - ・ 本事業の来年度実施計画書の提出について
- 第 27 回（1 月 28 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 来年度の行事計画について
 - ・ 学校設定教科の申請について
 - ・ 教員研修について
- 第 28 回（2 月 4 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ 惟信マルシェについて
- 第 29 回（3 月 11 日）
 - ・ 各チームの進捗状況について
 - ・ チーム B・チーム C の協議内容について
 - ・ 惟信マルシェについて

1-2 プロジェクトチームの活動

(1) Aチーム

Aチームは、「総合的な探究の時間」の企画・運営に携わるチームとして発足した。毎週1回（1年は木曜日4限、2年は金曜日2限、3年は火曜日4限）、執行部で立案した「総合的な探究の時間」のプログラムを、執行部と各学年主任・学年担当で協議し、それぞれ学年の協力を得て実践・運営した。各学年の大まかな取組については以下のとおりであるが、それらのねらい・意義については、第Ⅲ章「3 コーディネーター考察」において詳しく説明する。

○1年生

- ・4月：オリエンテーション「高校生になる」「探究活動とは」、60秒スピーチ
- ・5月：「学び調べ」、「大学人インタビュー」同報告会、学年発表
- ・6月：「地元の宝探し」個人探究、班発表、クラス発表
- ・7月：「地元の宝探し」事前研究、フィールドワーク（取材）
- ・8月：「地元の宝探し」フィールドワーク（取材）
- ・9月：「地元の宝探し」訪問レポート、及び、「惟信マルシェ」候補選抜
- ・10月：「地元の宝探し」事後研究、及び、ポスター製作
- ・11月：「地元の宝探し」ポスター製作、「ディベート的主張発表会」
- ・12月：「ディベート大会」クラス内
- ・1月：「ディベート大会」クラス抵抗
- ・2月：「地元の宝」発表準備、一年の振り返り
- ・3月：成果発表会、「惟信マルシェ」

○2年生

- ・4月：オリエンテーション（昨年度の振り返りと今年度の姿勢）
オリエンテーション「ディベート」
- ・5月：「ディベート大会」クラス内、クラス抵抗
- ・6月：「未来への主張」（メイン活動）
「My First Opinion」から班での助言を受けて「My Opinion」へ
→「Team Opinion」
- ・7月：「Team Opinion」事前研究、フィールドワーク（取材）
- ・8月：「Team Opinion」フィールドワーク（取材）
- ・9月：「Team Opinion」訪問レポート作成、及び、事後研究
- ・10月：「Team Opinion」主張の深掘りディベート的準備・発表
- ・11月：「Team Opinion」発表準備（パワーポイント製作）
- ・12月：「Team Opinion」クラス内成果発表会、代表選出
- ・1月：「My Opinion」の探究、まとめ（クラス毎の冊子作成）
- ・2月：「My Opinion」クラス発表、成果発表会準備、一年の振り返り
- ・3月：成果発表会、「惟信マルシェ」

○3年生

- ・4月：「私の未来希求」オリエンテーション、課題設定
- ・5月：「私の未来希求」自分の主張（仮）、発表、振り返りと反省

- ・ 6月：「私の未来希求」データ収集、自分の主張深掘り
- ・ 7月：「私の未来希求」まとめ、発表、振り返り
- ・ 8月：「進路研究」
- ・ 9月：「進路研究」、「生涯の学びを獲得する」第一の視点からの研究
- ・ 10月：「生涯の学びを獲得する」第二の視点、第三の視点からの研究
- ・ 11月：「生涯の学びを獲得する」第四の視点からの学び、まとめ
- ・ 12月：「生涯の学びを獲得する」まとめ、論文作成準備
- ・ 1月：「生涯の学びを獲得する」論文作成、冊子の作成
- ・ 2月：一年の振り返り

(2) Bチーム

Bチームは、「学校設定教科」のカリキュラム開発を行った。日程は会議・行事のないところを見計らい、以下のように不定期に行われた。

- 第1回（4月23日）
 - ・ 学校設定教科の目指すところについて
- 第2回（5月10日）
 - ・ 学校設定教科の目指すところについて
 - ・ 学校設定教科の概要について
- 第3回（6月11日）
 - ・ 学校設定教科の目指すところについて
 - ・ 学校設定教科の概要について
- 第4回（6月14日）
 - ・ 学校設定教科の目標、育てたい資質・能力について ※ 参考資料 ②
- 第5回（7月23日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第6回（7月25日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第7回（7月26日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第8回（7月29日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第9回（8月7日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第10回（8月27日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
- 第11回（9月6日）
 - ・ 学校設定教科の具体案について（検討）
 - ・ カリキュラム変更について

- 第12回（10月4日）
 - ・学校設定教科の具体案について（検討）
- 第13回（10月18日）
 - ・学校設定教科の具体案について（検討）
- 第14回（10月25日）
 - ・原点授業について（コーディネーターによるモデル授業）
- 第15回（11月29日）
 - ・学校設定教科の具体案について（検討） ※ 参考資料 ③
 - ・外部講師について
- 第16回（3月13日）
 - ・学校設定教科の評価について

（3）Cチーム

Cチームは「授業改善」を目標とし、各学期に研修を実践することで学校全体での授業改善の機運づくりに取り組んだ。会議日程と各学期の主な内容は、以下のとおりである。

- 第1回（4月26日）
 - ・授業改善の目標について
 - ・授業改善のための手立てについて
- 第2回（5月7日）
 - ・授業改善の目標について ※ 参考資料 ④
 - ・授業改善のための手立てについて
- 第3回（8月28日）
 - ・1学期の研修について（授業参観の振り返り、各教科研修の振り返り）
 - ・2学期の研修について ※ 参考資料 ⑤
- 第4回（10月25日）
 - ・原点授業について（コーディネーターによるモデル授業）
- 第5回（12月9日）
 - ・2学期の研修について（授業参観の振り返り、公開授業の振り返り）
- 第6回（1月10日）
 - ・3学期の研修について ※ 参考資料 ⑥
- 第7回（3月13日）
 - ・3学期の研修のまとめ（1年間の取組の振り返り） ※ 参考資料 ⑦

【1学期】

教科を超えて教員3人1組でグループを作り、授業参観をしあった。他教科の授業を参観する機会、他教科の教員から意見をもらう機会はありませんでした。そのため、普段とは違った視点からの参観とすることができた。また、各教科でそれぞれ独自に設定した研修もおこなった。

【2 学期】

主に理系生徒を対象としたコーディネーターによる数学の公開授業をおこなった。内容は「確率」の導入部分で、さいころの実演を交えながら確率について解説した。生徒は重要事項を発声し、「確率」の根源を理解した。教員も約 20 名が参観し、自身の授業改善への糧とすることができた。

また、1 学期に引き続いて教員間の授業参観も実施した。1 学期とは違ってグループは組まず、1 人につき自教科へ 1 回、他教科へ 1 回の授業参観を目標として呼びかけた。本校では授業公開週間と題して授業参観が推奨される期間がもとよりあったが、今年度はチーム C からの呼びかけも相まって自教科 57 回他教科 69 回の計 126 回と、例年を大きく上回る授業参観をおこなうことができ、教員間での授業改善に向けた機運を高めることができた。当初の自教科 1 回他教科 1 回という目標も達成することができたが、多くの参観をこなす教員がいる一方で目標を達成していない教員もいるため、引き続き学校全体での授業改善への意識づくりは継続していく。

【3 学期】

前学期に引き続き授業改善に取り組むとともに、目指す授業のあり方や、今年度の実践、来年度に向けた展望をまとめ、全教員で共有し、振り返りをおこなった。

1－3 新学科開設準備委員会

新学科開設に向け、未来を切り拓く人材の育成と生徒の自信創出に向けた教育を推進するために、旧「探究推進委員会」に管理職・運営委員会メンバーを加え、「執行部」及びプロジェクトリーダーが新「探究推進委員会」において企画・立案する新学科開設に向けた方向性を確認・了承する。本年度の会議日程と議題は以下のとおりである。

- 第 1 回（5 月 9 日）
 - ・来年度入試における新学科の募集形式について
 - ・新体制における進捗状況について
 - ・今年度の展望について
- 臨時（5 月 20 日）
 - ・来年度入試における新学科の募集形式について
- 第 2 回（6 月 18 日）
 - ・新体制における進捗状況について
 - ・中学校での P R 方法について
- 第 3 回（7 月 30 日）
 - ・新体制における進捗状況について

- ・「探究」の意義について
- 第4回（9月10日）
 - ・新体制における進捗状況について
 - ・「総合的な探究の時間」成果発表会、及び、惟信マルシェの日程について
- 第5回（1月14日）
 - ・1月31日第6回新学科開設準備委員会での協議に向けて
- 第6回（1月31日）
 - ・新学科開設準備における最終協議「ワクワクプラン」について

1－4 職員研修

今年度の職員研修は以下のように行われた。

- 第1回職員研修（7月24日）
 - ・「探究」について ※ 参考資料 ⑧
 - ・コーディネーターからの提言
- 第2回職員研修 授業公開（10月15日）
 - ・コーディネーターによる「主体的、対話的で、深い学び」のモデル授業

創立101年目のスタートに
新学科を開設し、期待と不安を
抱いて入学する新入生を迎える
我々教員の側が共有する大きな
期待と目指すべき姿・方針

1－5 運営指導委員会

- 第1回（6月20日）
 - ・「事業進捗状況報告」について
 - ・運営委員による指導
- 第2回（2月13日）（予定）
 - ・「事業進捗状況報告と次年度への課題」について
 - ・運営委員による指導

1－6 コンソーシアム

- 第1回（5月16日）
 - ・「コンソーシアム設立の経緯と事業進捗状況報告」について
 - ・コンソーシアム構成員による助言
- 第2回（8月1日）
 - ・「事業進捗状況報告」について
 - ・コンソーシアム構成員による助言
- 第3回（1月21日）
 - ・「事業進捗状況報告」について
 - ・学校設定教科の内容説明と講師依頼について
 - ・コンソーシアム構成員による助言

2 活動実績

2-1 先進研究校視察

【日程】

令和6年9月12日(木)～13日(金)

【訪問先】

高知県立山田高等学校（高知県香美市土佐山田町）

【所感】

山田高校は普通科、グローバル探究科、ビジネス探究科を有し、地域密着型の教育を提供している。最寄りの「土佐山田」駅は無人駅で、中心地から離れた静かな場所にあるが、近隣に高知工科大学があり、高大連携が進んでいる。地域企業や市の協力も得ており、生徒は地域の将来を担う人材として期待されている。

視察では、まず校長から学校の概要や指導計画について説明を受け、特に評価方法に注目した。山田高校では、生徒自身の自己評価と教員による評価を組み合わせたループリックを活用し、非認知能力の成長を可視化している。探究活動を通じて「主体的に学習に取り組む態度」が向上している。

グローバル探究科は、大学進学を前提に、生徒は進学補習や模擬試験、共通テストを受け、探究力やプレゼン力が大きく向上している。1期生は約9割の生徒が国公立大学に合格し、特に総合型選抜での成功が目立つ。

授業参観では、探究リテラシーの授業を見学した。少人数制で、教員や外部サポーターが手厚くサポートしており、生徒は3人一組で課題を進め、仮説や検証方法を考えながら探究活動を行っていた。また、探究活動が進路選択に好影響を与え、特に推薦入試で自信を持って自己表現できるようになったと聞いた。

惟信高校としては、山田高校の探究学習の進め方や教員の生徒をサポートする姿勢を参考にする点が多くある。特に、教育課程全体を見たうえで、3観点の中で比重を置く観点を設定することに加えて、それに関する手立てを考えることが求められる。また、探究活動の進捗をICTで管理し、教員が生徒の思考を引き出すことや、外部機関や専門家との連携を強化し、資金調達やネットワーク作りを進める必要があると感じた。

今後、惟信高校でも探究活動をより一層推進し、地域連携を深めることで、生徒の主体的な学びを支えていきたいと考えている。

2-2 「総合的な探究の時間」の取組

本事業に採択される前年度、新学習指導要領の施行に向けて、本事業に先立つ「人材育成委員会」で「総合的な探究の時間」の見直しが図られていた。その結果、どの教員にも指導が可能となる市販の教材を用いた指導を行うことのできる3年間の指導計画ができ上がりつつあった。しかし、機を同じくして、本事業申請への意志確認がなされた際、本事業に採択された場合は「総合的な探究の時間」を見直すこととした。この見直しは、「実践力」と「自立型思考力」の育成を目指す本校独自の「総合的な探究の時間」の開発をもって、都市型公立普通科高校においての汎用性と普遍性を備えた探究活動への挑戦を意味するところにあった。

本事業での採択決定は、令和5年4月25日であり、正式契約を結ぶにはさらに日数を要するため、昨年度は前年度計画に基づいて「総合的な探究の時間」を開始し、本事業の方向性を検討しながら、「総合的な探究の時間」についても検討がなされた。第1学年は市販の教材に一応の区切りがつく10月を目途に、第3学年については9月2学期当初から、新学科開設年度から行われる「総合的な探究の時間」の先行実施を行うこととした。第2学年については、年間を通した外部機関との申し合わせがあったために、その先行実施を見送った。昨年度も、先行実施となった第1学年・第3学年の具体的な取組については、「コーディネーター考察」において報告したところであるが、3学年全面施行となった今年度の取組についても、第Ⅲ章「事業検証と次年度に向けて」の4「コーディネーター考察」において詳細を後述する。また、昨年度の取組を通して顕著な成長が見られた生徒の作文を巻末に参考資料として掲載する。 ※ 参考資料 ①

2-3 成果発表会

- 1 目的：これまでの探究活動の成果発表を通して活動を振り返るとともに、他の探究活動の成果を知り、見識を広げる。
- 2 日程：令和7年3月6日（木）5・6限
- 3 参加者：1・2年生（全員）
- 4 場所：本校体育館（惟信館）
- 5 内容

1年生 探究活動のテーマ

「地元の宝探し」をテーマに探究活動を実施。生徒が自分で考え、実行する。生徒が主体となった活動の象徴としてクラスの活動運営は、探究委員が担当。

《活動内容》

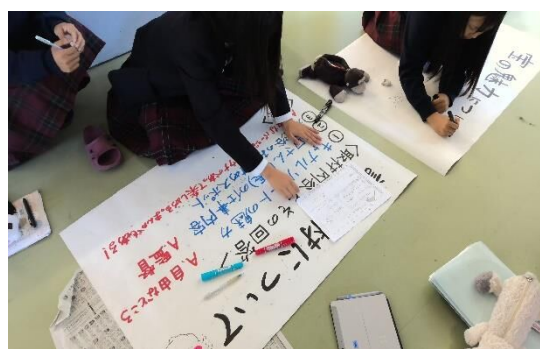
- ① 1年生全員が個人で「地元の宝」を探し、紹介。
- ② 個人発表から「チームの宝」を選抜。チーム協力で、宝の調査・研究。
- ③ 宝関係者への訪問取材、調査研究の協議・まとめ、ポスター作り・クラス発表。

《発表形式》

壁に発表資料を掲示しておき、発表班以外の1年生と2年生は随時興味関心の高いものを選び、ポスターを見ながら遊覧し、発表を聞く。



教室での授業



ポスター作製



成果発表会①



成果発表会②

2年生 探究活動のテーマ

「未来への主張」と題して、自分、そして世界の「未来への課題」を見つけ、探究する。

生徒が自分で考え、実行する。生徒が主体となった活動の象徴としてクラスの活動運営は、探究委員が担当。

《活動内容》

- ① 2年生全員が社会の課題から個人で主張を見つけ、紹介。
- ② 個人の主張からチームで取り扱うテーマを決め、研究。
- ③ 関係者への訪問取材、調査研究の協議・まとめ、PowerPoint 作成、クラス発表。

《発表形式》

- ・成果発表会でクラス代表が舞台上でプレゼンテーション



教室での授業①



教室での授業②



成果発表会①



成果発表会②

2-4 「惟信マルシェ」 ※ 参考資料 ⑫

- 1 目的：発見した地元の宝に実際に触れることで、地域への理解を深めるとともに、社会人との交流を通して生徒の生きる力を育む。また、本校の探究活動の一端を地域へ発信する。
- 2 日時：令和7年3月14日（金）
- 3 場所：本校敷地内屋外スペース及び教室
- 4 内容：生徒会主導で毎年開催してきた本校伝統の文化祭「柊祭」の模擬店・教室発表のイメージ。地元と協力し、地元・本校合同マルシェを地域住民、近隣中学生、保護者を招いて開催する。屋外でテントを用い、ご協力を得た地元の方と招待したクラスが協力して合同で運営（1クラス1ブース1発表を予定）。一方教室で、1年生「地元の宝」、2年生「未来への主張」をテーマに各クラス発表を掲示や解説などで紹介する。



教室での発表



教室発表 廊下掲示



地域との合同発表



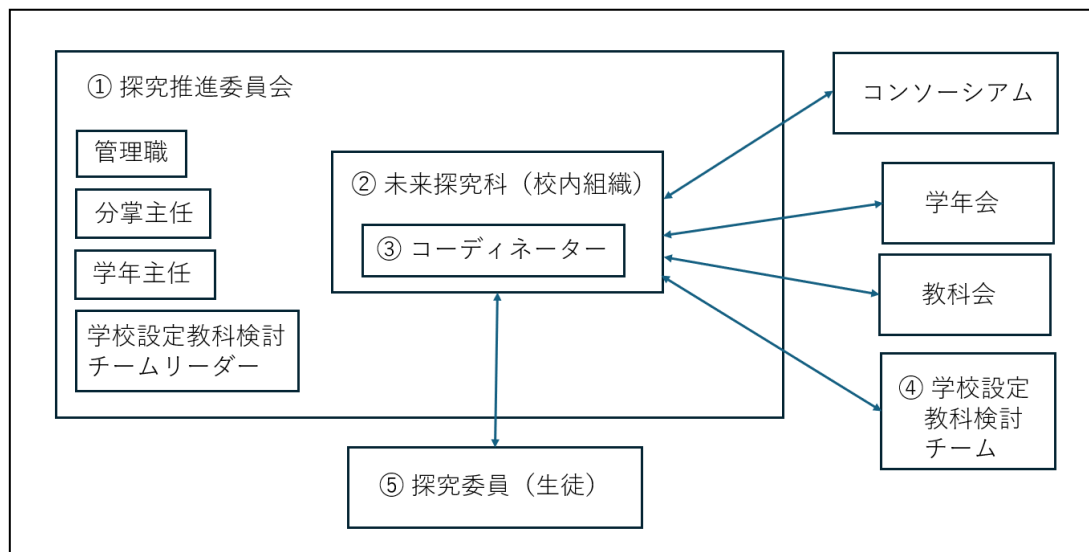
パンフレット表紙（生徒作成）

第三章 事業検証と次年度へ向けて

1 本年度の反省と課題（成果概要図）



2 事業運営体制の見直し



① 探究推進委員会

管理職、分掌主任、学年主任、学校設定教科検討チームリーダー、未来探究科（校内組織）、コーディネーターで構成する。未来探究科（校内組織）の立案を確認・承認する。新学科「未来探究科」及び普通科における探究的な取組を推進する。

② 未来探究科（校内組織）

分掌に準ずる位置づけとして各学年に1名ずつ所属する部員、コーディネーターで構成する。「総合的な探究の時間」の計画・立案や、新学科「未来探究科」における学校設定教科を中心としたカリキュラムマネジメントを担う。

③ コーディネーター

未来探究科（校内組織）に所属し、「総合的な探究の時間」、「未来探究科」の取組の概要を計画し、具体的な実践活動を支援する。特に、地域の方々との生徒交流の方法、円滑な実践を支援する橋渡しの役割の中心を担う。

④ 学校設定教科検討チーム

新学科「未来探究科」の学校設定教科「探究実践」及び「学び探究」のカリキュラム開発、授業実践を行う。

⑤ 探究委員（生徒）

「総合的な探究の時間」の生徒リーダーとして、運営の一端を担う。

3 コーディネーター考察

梶本 郁二

令和7年3月14日、昨年より始めた惟信高校地域連携イベント「惟信マルシェ」の第2回が無事終了。今年度1年間の総合的な探究の時間、一学年二学年の最終活動である。発表というには完成度は甘く、あくまでも生徒主導の手作りを優先とする行事である。今日の取組で、スモールステップを経験してくれた生徒は何人いるだろうか。ほっとしたと言う気持ちよりは、軽い疲労感にまた一歩進んだという実感を持つ。

4月には、新学科未来探究科の新入生を迎える。あがきながら、ただ挫折せずにここまで来たことにのみに達成感を感じる。本校の普通科改革事業において、コーディネーターとして、先生方と共に、この事業をよりよく達成するため、一步一步歩んできた2年間であった。明確な手本や既定路線のない事業であり、暗中模索の中の歩みは、まさに私自身の探究実践の日々であった。

この間「探究とは?」「探究の意義は?」「効果的な探究の時間の取組みは?」

「新しい普通科の目指す理想とは?」これらが常に頭に巡り、自分なりの答えを求め続けることの繰り返しだった。文科省が推進する高校での普通科改革は、ここ数年着実に進行しており、その成果が明らかな先進校も多くあるが、その大半は都市部ではなく、過疎が進む地方の高校であり、地域活性化に一役を担うという側面も大きく、本校が属する名古屋市という都市部の普通科改革は未知数である。私のように、そして本校のように手探りで進んだ軌跡が少しでも他校の参考になれば本望である。

いくつかの点について、自分の経験を通して実感できたことを記します。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 探究事業の必要性と可能性② なぜ探究活動が効果的に広まらないのか。③ 本校の普通科改革事業における具体的な方策。 |
|--|

探究事業の必要性と可能性

探究教育の可能性は大きい。その意義は、教師主導の既存の教育の課題克服にある。課題は、子供たちの主体的な思考力や判断力の育成である。もう少し具体的に表す。

既存教育手法の問題点 ・ 教員主導の生徒受動型指導。・ 与えられた決まった正解
・ 点数主義で、他との比較での評価

育成の課題 ・ 主体的な意見を持てない。・ 自分なりの解を求めないから、マニュアル頼みになる。・ 周囲の意見に流されて、自立が出来ない。

これらはずっと以前から、日本の課題としてあげられていることだが、この傾向はさらに顕著となっていると確信する。インターネットやSNSの拡張の悪影響も。この課題を意識して、**探究教育の役割**は、・ 生徒主導でまず取り組むこと。

- ・ 不確定な解だからこそ、自分の納得を求めて、自分で道を切り拓く。
- ・ 責任感を持ってやり遂げ、自分なりの達成感を手にし、自信につなげる。

どんな小さな事でも良い。主体的な取り組みから自分なりに納得できる何かを掴んでいくことが大きい。そのような自己達成感がスモールステップとなり自信につながる。決められた正解ではなく、自分なりの適正解を見つけることが、少しずつ自分の中に判断軸を育てる機会となる。これは規定路線に受動的に従うだけの一般授業では難しい。探究教育の目指すところそのものである。

なぜ探究活動が効果的に広まらないのか。

これは、日本教育の構造的な悪循環が大きいと強く感じる。教員は学校を出て学校に入る。社会の現場感が少ない実態は否めない。教員が授業の手本や教育活動の根本とするところは、自分が受けた教育である。

「自分が教わったように教えて、何故いけないのか。」当然の立ち位置である。

受動的な教育に浸ってきた教員が主導的な教育を実践することは容易ではない。社会の現場や国際競争で起きている問題にも実感は少ない。改革の意義、必要性を感じずに表面的に文科省の提案に従っている部分が多いことが、一番の問題点であろう。文科省は、改革の必要性、その理念を教員全体にもっと浸透させることに第一に力を注ぐことが必須であり、そのことが改革に積極的に取り組む者への大きな支援となる。

本校の普通科改革事業における具体的な方策。

新学科は7クラス中の1クラス、新しい普通科を目指すこの改革においては、普通科も含んだ学校全体の改革を目指すことを当初からの必須事項とした。

そのための2つの具体的な方策を柱に、進めてきた。

一つは、本校独自の「総合的な探究の時間」を開発し、全生徒で実施すること。もう一つは、一般授業で「生徒が主体的に取り組み、教科の本質的魅力を伝える授業」に全職員で取り組むことである。

前者については、1年生「地元の宝探し」2年生「未来への主張」3年生「生涯の学びを獲得する」といったタイトルの授業を開発して、すでに試行実施したが、今後、各内容をより整備し、3年間の関連性も考えて、より生徒の主体性を育成できるものとして創り上げていく。

授業で大切にしたい要点は、「本校および本校生徒に適した内容」、何よりも「生徒主導の取組を優先」、「手本を示さず、決められた正解を持たない」、「社会とのつながりを大切にする」などである。授業は、毎時間のワークシートを執行部で製作し、授業運営はクラス2名の探究委員の生徒が務める。(各学年のワークシートの一部 ※ 参考資料⑨～⑪)

各学年の取り組みのワンポイント感想

- ◎1年生 年度当初より惟信の探究に取り組めたことは大きく、皆に誠実に臨む姿勢があり、訪問交渉、発表ポスター制作、すべての活動で円滑に積極的に取り組めた。
- ◎2年生 「自分の意見を持つ」をテーマに臨んだが、題材選択の時点で視野の差が大きくその後の活動姿勢に響いた。クラス代表のプレゼンはどれも感動レベルだった。
- ◎3年生 「生涯の学び」という難題に臨み、様々な視点から「自分の学び探究」に取り組んだが、最後の小論では、「学びの獲得」より「このような人生を送る」という意思表示が多く見られ、意図に反するも、これも不確定な探究活動の一面と学んだ。

後者については、昨年より全教員で検討を進めており、ねらいをまず全体研修会で共有し、その後各教科での協議を継続し、各自の授業研究に全員で取り組んだ。互いの研究状況を共有し、今後も惟信の探究的授業のねらいを再確認した上で、今後も各自で授業研究に取り組む（それぞれの内容は別頁で前述）。

参考資料

<参考資料①>

【生徒作文】

初めての経験

2年 田屋 海晴

私は「探究」という授業が導入されるということを高校に入学して初めて知りました。どんな内容の授業なのかという興味と私が今後やっていける授業なのかという不安がありました。でも説明を聞いていく中で「探究」の存在意義を知りました。それは「自分で課題や問題点を探し、見つけ出したりしたりして解決策や結論を出す」ことにより「物事を考える力を養われ、まとめた資料を上手に見せられる」といった社会に出た時に活用したり応用したりできる、将来の自分のために特化した授業だと正直に思いました。

探究授業での初めての實習は外部との交流を踏まえた、自分が思う「地元の宝」を調べ、実際に訪問して、まとめるというものでした。そして、まとめた資料や訪問先の出し物を提示しながら、他学年や地域の方に発表する「惟信マルシェ」という形で一年の幕を終わらすというものでした。壮大な計画であり、選ばれた人は責任重大なものだと思いました。

私は小さいころから遊んでいてお世話になった地元の公園を紹介したいと思い、みんなに発表したら、私が代表に選ばれてしまいました。代表に選ばれたとき、リーダーになった経験がなくてみんなをまとめられるか不安に思ったのと、完成図が頭の中に出来ていなくて本当に完成するのか不安でいっぱいでした。でも代表になったからにはやりきるしかないと思いました。そこからは訪問の許可を貰うために電話やメールを利用して、相手方とのやり取りをしました。そして、訪問の様子や訪問して得た情報をまとめて発表しました。そうしたら「惟信マルシェ」にも選ばれてしまいました。メンバーと展示品や出し物は何がいいか、またどのような物が公園を宣伝するのにいいかと考えたり、相手方と綿密に相談したりして、多少のハプニングもありつつ無事当日を迎えました。「マルシェ」をやってみて思ったことは、思った以上に外部の方が足を運んでくださったことでした。その方々には公園の魅力や特徴などを伝えられたかなと思います。ただ残念に思ったことが一つあります。それは出入り口付近に食べ物系の出し物が沢山あり、皆さんがそちらに気を取られすぎて、食べ物班に比べたら奥にあった展示系の班まで来てもらえず、せっかく準備したのに、という思いは残りましたが、大きな達成感がありました。

一年を通して私が成長したと思ったところの一つ目は、メールの書き方が分からない状態から分かるようになったことです。相手方とのメールでやり取りをする時、正確なメールの打ち方が一切分からず、知識が皆無の状態から SNS で調べたり両親に聞いたりして、相手に失礼のないようなメールが完成した時は嬉しかったです。そして皆より一つ上を行けた気がして優越感を抱きました。

二つ目は、物事を完成させ目標を達成することです。自分がリーダーになったことやグループで目標を達成したことがないので、それも一つ成長した方だと思いました。

三つ目は、目上の方との接し方です。私と相手の方との一対一の対応が多く、相手

に失礼がないようにするにはどうすればよいのかを考えました。トラブルを回避し、「惟信マルシェ」でどのように展示物や宝の紹介をするのがいいのか、相手の方と沢山話し合いました。グループ活動が軸だからメンバーの意見も多数入っているけれど、相手の不都合やこちらの限界も含めて考えると、やはり話し合うことは必須で、いろんな案を出し合い、最終決定に持っていくまでの対応や最低限の気遣いが私なりには最初と比べたら出来ている、成長している、と感じました。

四つ目は、物事の見方が変わったことです。やはり選ばれた最初の方はハプニングが起きて、「なんで私がリーダーなんだろう」とか、「なんで思うようにできないんだろう」と思うことが多々ありました。でも挫折そうになったり放棄したくなったりもしたけれど、コーディネーターの榎本先生が「経験がないから失敗することもあると思うけど、今はその失敗を反省し次に活かしていけばいい、それもまた経験。」「今ここにいるということは素晴らしい経験で、他のみんなより一歩先にいる。」と仰っていただいたことが、物事の見方を変える転機になりました。マイナス思考よりもプラス思考で、今自分ができること、そして、今の行動は未来の自分に貢献していると考えられる意識の成長にもなりました。そして、「探究」をして私自身が思ったことは、「行動してこそ価値がある」ということです。上記の通り、たとえ失敗してもまた立ち上がればいい、経験を多く積めた者が人生を豊かにすると私は感じました。私の考えではなく「探究」の授業全体で考えると、得意不得意が目に見えて分かりやすい授業だと思いました。得意な人は徹底的に深掘りして、得た情報をきれいにまとめて発表する。一方、苦手な人は何事においても腰が重く、どこか他人行儀な方が多いというイメージです。



令和5年度 惟信マルシェ

【生徒作文】

七転び八起き

2年 安達 天翔

私は惟信高校で始まった1年目の新しい取組で「探究活動」に深く関わり、恥ずかしながら自分でも成長できたと実感しています。普段関わることができない人と関わることができ、普段できないことを経験できたことで、「探究活動」が自分にとってとても貴重な体験となりました。いつ自分に火が付いたかわかりませんが、そのことに気が付いたのは、1年生の活動がすべて終わった時でした。

「探究活動」が始まった当初、私は「探究」についてあまり興味はありませんでしたが、探究のテーマである自分の町の「宝探し」に真面目に取り組みました。クラスの中で8人の代表に選ばれ、各班のテーマに関連する場所を訪問取材することになり

ました。そこで私は「転びました」。先方に訪問取材する日時を間違えて伝えてしまいました。本当に申し訳なく、自分のミスで何人もの人に迷惑をかけてしまいました。しかし、先方様の適切な対応のおかげで無事訪問取材をすることができました。そして、またすぐ「転びました」。私が訪問取材した場所は、私のテーマと深くは関連しておらず、中途半端なまま訪問取材が終わってしまいました。その時責任の重さを痛いぐらい感じました。

「宝探し」は、地域の方々をお招きして紹介する「惟信マルシェ」へと発展します。ミスばかりの中でしたが、「マルシェ」にふさわしい班としてクラスの代表になってしまいました。そんな中で、また私は「転びました」。私一人で取材して担当の方と様々な準備を進めているとき、何を紹介するか、必要なものは何かということ、何も提案できずに担当者を困らせてしまいました。その後、自分から何回もお願いして取材し、話し合いをさせてもらいました。そうした話し合いの中から、先方から何を紹介したらよいか、何が必要かということ提案してくださったおかげで、準備が進みました。自分の中では、起き上がることができず、自分の力のなさがよくわかる出来事でした。

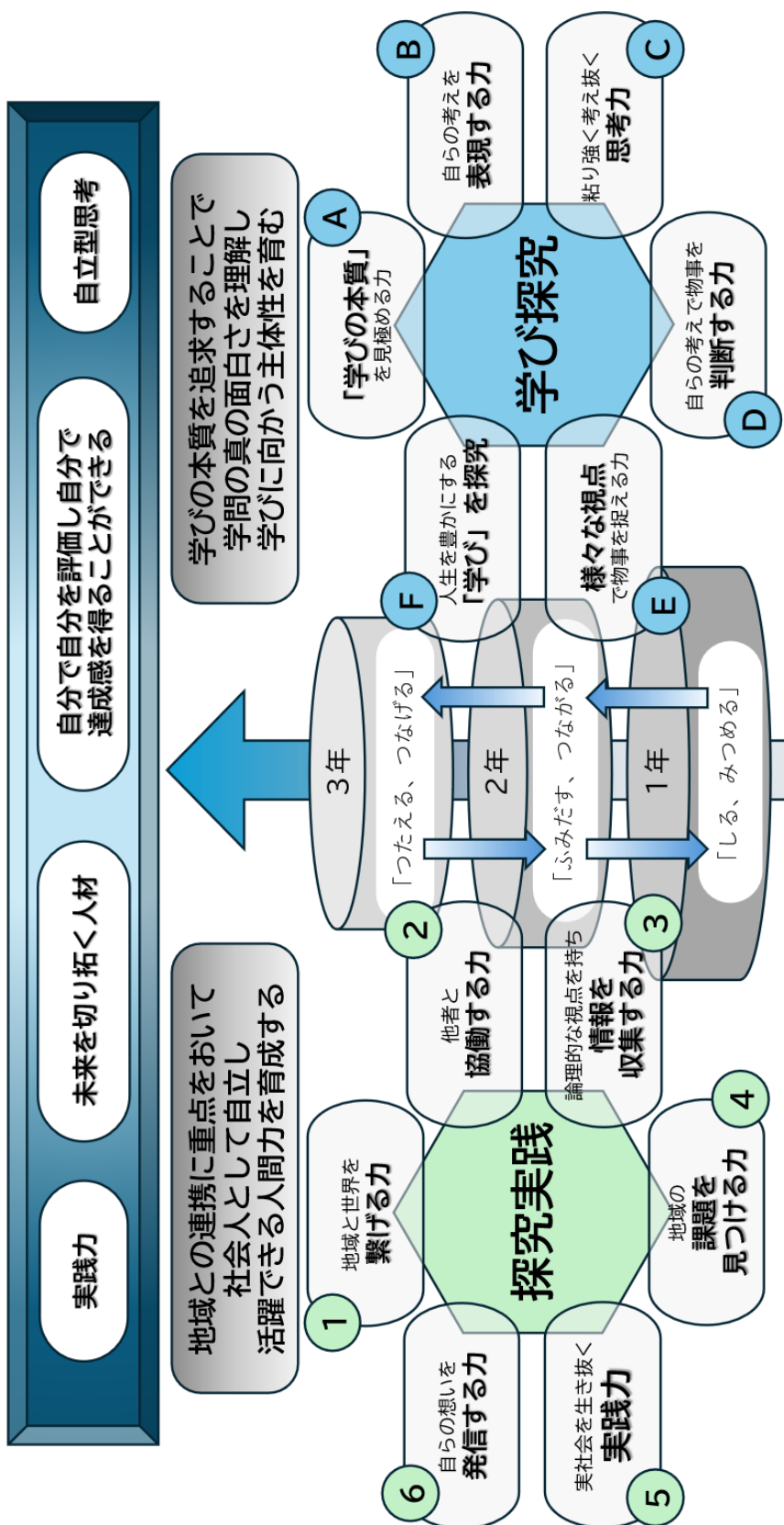
マルシェ当日は、担当の方々のお手伝いができないくらい忙しく、申し訳なく思いました。そして、ここでも私は「転びました」。各説明の人数配分のミスをしてしまい、お客様に長い待ち時間を作ってしまいました。待ち時間が長いと、お客様が他のところへ行ってしまうのですが、私が機転を利かせることができて問題は収まりました。とても切羽詰まった「マルシェ」でしたが、何とか無事に終えることができました。

私はほかにも小さなところでたくさん転んでいます。しかし、何に対しても諦めず、投げ出さず、責任を持って行動すれば、行動前・体験前の自分とは比べ物にならないほど成長できます。「探究活動」は、つまりはチャンスです。そのチャンスをどこまで自分のものにできるか、そして、それを生かすことができて初めて「探究活動」に意味があると言えると感じました。



令和5年度 惟信マルシェ

愛知県立惟信高等学校 未来探究科 学校設定教科 教科目標



1年生

【身につけさせたい6つの力】

- 1 地域と世界を繋げる力
- 2 他者と協働する力
- 3 論理的な視点を持ち情報を収集する力
- 4 地域の課題を見つめる力
- 5 実社会を生き抜く力
- 6 自らの思いを発信する力

【身につけさせたい6つの力】

- A 「学びの本質」を見極める力
- B 自らの考えを表現する力
- C 粘り強く考え抜く思考力
- D 自らの考えで物事を判断する力
- E 様々な視点で物事を捉える力
- F 人生を豊かにする「学び」を探究する力

＜参考資料③＞ 【チームB「学校設定教科」の内容（1年次）】

身につけさせたい力						探究実践Ⅰ						学び探究Ⅰ						身につけさせたい力					
1	2	3	4	5	6	目標	コア	時期	コマ	コア	時期	コマ	目標	A	B	C	D	E	F				
							オリエンテーション【1コマ】		1			1	「原点授業」①【5コマ】										
							「未来コミュニケーション」【4コマ】		2			2	・教科の本質を理解し、「学び」に対する主体的な姿勢を養う。										
	○				○		・人間関係のトラブル回避及び良好な人間関係の構築のためのコミュニケーションの向上		3			3	・小、中の内容に立ち返り、根本的な理解を促す。					○					
									4			4						○					
									5			5											
							地元企業①（企業運営について）【1コマ】	1年	6		1年	6											
								1学期	7		1学期	7											
								【13コマ】	8		【13コマ】	8	「教科の魅力探究」【8コマ】										
							「デザイン思考」【10コマ】		9			9	・学びに対する姿勢、教科の本質的な魅力を探究する。										
○	○						・身の回りの課題を発見し、仮説を立てて検証し、解決策を見出すまでの手法を学び、探究活動の基本を身につける。		10			10	・PPで教科の魅力をまとめ発表する。					○					
									11			11	・表現力を向上させる。					○					
									12			12											
									13			13											
									14			14	「原点授業」②（国語）【2コマ】					○					
○	○						「デザイン思考」（1学期からの続き）		15			15						○					
									16			16	「原点授業」②（社会）【2コマ】					○					
							地元企業②（SDGsに関する取組①）【1コマ】		17			17											
							地元企業③（SDGsに関する取組②）【1コマ】	1年	18		1年	18	「原点授業」②（数学）【2コマ】					○					
								2学期	19		2学期	19						○					
								【11コマ】	20		【11コマ】	20	「原点授業」②（理科）【2コマ】					○					
							「SDGs系」【15コマ】		21			21						○					
							・探究活動の実践を通して、地域の課題を知り、その解決するための手段を考える。また、その課題から、未来の信託高校の姿を考える。		22			22	「原点授業」②（英語）【2コマ】					○					
○	○								23			23						○					
									24			24	大学①（学びについて）【1コマ】										
							地元企業④（地域とSDGs①）【1コマ】		25			25											
							「SDGs系」（2学期からの続き）		26			26											
							（持続可能な地区計画with信託高校～港区版SDGs～）		27			27	「地域と防災」【10コマ】										
○	○				○		・『持続可能』というキーワードから様々な視点で物事を捉える力を養う。	1年	28		1年	28	・防災を通して、港区の現状や課題を知る。										
							・名古屋市港区版のSDGsを作成する。	3学期	29		3学期	29	・自分の学びを地域の人に還元する。						○				
							地元企業⑤（地域とSDGs②）【1コマ】	【11コマ】	30		【11コマ】	30	・「人のために学ぶ」一学んだことを誰かに伝える。										
									31			31											
									32			32											
○					○		「SDGs系」（続き）		33			33											
							・まとめまで		34			34											
									35			35	1年間の振り返り										

<参考資料④> 【チームC 授業改善に向けて（1学期）】

5/20 運営委員会

5/23 職員会議

チームC 「GO!AL授業」～目標に向け、主体的に学ぶ～

1. 目的

教員と生徒の両方が授業のあり方を再確認する。生徒が「授業に主体的に取り組む」姿勢を求め、自立を促していく。（教務 授業公開週間目標）

+ AL 授業を学校全体で実施し、下記の目指す授業を実現する。 ※AL：アクティブラーニング

目指す授業

- 1 アクティブラーニング授業による生徒が主体的に参加している授業
- 2 生徒が考える場（思考する場）を十分に与えている授業
- 3 教科の本質に触れ、生徒が魅力を感じる授業

I 学校全体で行う研修

1. 研修内容

授業参観

2. 研修方法

3人1組（教科別）で、グループ内で互いに授業参観→意見交換→各人が報告を8月26日（月）までに入力。

3. 期間

1学期（夏休みを含む）

4. 備考

授業公開週間 I期（令和6年6月4日（火）～6月19日（水））の期間を積極的に利用して研修を行ってください。1学期の特別公開授業 実施予定者は同研修と兼ねてもOKです。

入力場所

hirotab.Z:¥R06¥4_校務分掌¥7_図書¥★新学科開設準備委員会¥チームC¥授業参観報告（1学期）

II 各教科で行う研修

1. 研修内容

各教科の案を参考に、教科会で意見交換して自教科で実施するものを決定する。新しい案でもよい。

下記の場所に5月31日（金）までに入力。→ 順次実施する。

2. 期間

1学期（夏休みを含む）

3. 備考

実施した研修を報告する。教科主任は研修内容のまとめを下記の場所に8月26日（月）までに入力。

9月5日（木）の職員会議で各教科主任から報告する。

入力場所

hirotab.Z:¥R06¥4_校務分掌¥7_図書¥★新学科開設準備委員会¥チームC¥各教科で行う研修（1学期）

＜参考資料⑤＞ 【チームC 授業改善に向けて（2学期）】

教科主 令和6年9月18日

運営 令和6年9月24日

職会 令和6年9月26日

チームC「Do try!」～性信の未来へ～

I 目的

- ・教員と生徒の両方が授業のあり方を再確認する。生徒が「授業に主体的に取り組む」姿勢を求め、自立を促していく。

（教務 授業公開週間目標）

☆目指す授業

- 1 生徒が主体的に学べる授業
- 2 生徒が考える場（思考する場）を十分に与えている授業
- 3 教科の本質に触れ、生徒が魅力を感じる授業

II 学校全体で行う研修

1. 研修内容

授業参観

2. 研修方法

自教科で1名、他教科で1名の授業を参観→意見交換→教科会等で参観集計。

3. 期間

授業公開週間を当初の予定から変更し、10月21日（月）～11月8日（金）の期間とする。

4. 備考

- ・下記Ⅲも積極的に利用して授業参観をしてください。
- ・また、10月15～18週の業後に2～3年理系希望生徒を対象とした講師による特別授業を計画しています。
希望する教員は後ろで参観する示範授業とします。

III 各教科で行う研修

1. 研修内容

生徒が主体的に学ぶ場面、内容を取り入れた授業実践

☆目指す授業

- 1 生徒が主体的に学べる授業
- 2 生徒が考える場（思考する場）を十分に与えている授業
- 3 教科の本質に触れ、生徒が魅力を感じる授業

2. 研修方法

各教科から1名が主体的内容を取り入れた授業実践を行う。実践者、時期、簡単な内容を10月4日（金）までに入力。指導案はなくてよい。

3. 期間

2学期

4. 備考

- ・上記Ⅱのため授業を教科会の時間にしたいなどあれば、実施日の2週前の月曜までに教務に時間割変更を依頼してください。

5. 入力場所

hirotab:Z:¥R06¥4_校務分掌¥7_図書¥★新学科開設準備委員会¥チームC¥各教科で行う研修（2学期）

<参考資料⑥> 【チームC 授業改善に向けて（3学期）】

運営 令和7年1月20日

教科主 令和7年1月22日

職会 令和7年1月23日

チームC「Do retry!」～惟信の未来へ止まらない～

I 目的

今年度の研修や取組を振り返り、教員各自が目標とする授業のあり方を再検討・再認識する。
各教員の取組や今後への展望を可視化、共有することで、惟信高校全体で授業改善への機運を高める。

II 学校全体で行う研修

1. 研修内容

各自の授業改善への取組と、その振り返りを行う。

2. 研修方法

1.2学期に引き続いて3学期も授業改善に取り組む。
それぞれが目指す授業のあり方を設定し、今年度の取組を振り返り、下記ファイルに入力する。

3. 期間

入力締め切りは3月7日(金)とする。

4. 備考

入力内容は3月18日の職員会議で報告させていただく予定です。
教科会を活用し、教科内での振り返りと共有の時間も設けてください。必要であれば教科内で入力締め切りを早めてください。

5. 入力場所

教育系:¥R06¥4_校務分掌¥7_図書¥★新学科開設準備委員会¥チーム C¥各教科で行う研修（3学期）

6. 入力例

	チームC 3学期（学年末）振り返り 教科（ ）		
☆目指す授業	1 生徒が主体的に学ぶことができる授業 2 生徒が考える場を十分に与え、思考力を育成する授業 3 教科の持つ本質的な魅力によって、学ぶ意欲を生み出す授業		
名前	あなたのわらい	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
惟信先生	・生徒が前向きな授業 ・様々な意見が飛び交う授業 ・上位から下位までの生徒も学びがある授業 ・実生活で役立つ学びを得られる授業 ・ICTの有効な活用	・毎時間「○○」という活動をおこない、基礎的学力の定着を図った ・映画「○○」を△△という観点から鑑賞し、思考力を磨いた。 ・○○の単元で△△をおこなった。	・今年度で自身の○○をレベルアップできた。 ・今年度は△△という点では課題が残った。 ・来年度は◇◇をしていきたい。 ・生徒は～ ・惟信高校全体では～
○○先生	「☆目指す授業」を踏まえて、個人がどのような授業を目指すか、自分のどのような点をレベルアップさせたいか、など。	3学期中に各自で実践した内容や、今年度に取り組んだ内容。 後日全体で共有するので、「自分こんなネタ持ってますよ!」という紹介があると嬉しいです。	今年度の取組の振り返り。所感。来年度に向けての展望。

<参考資料⑦> 【チームC「授業改善」振り返り（学年末）】

チームC 3学期（学年末）振り返り

- ☆目指す授業
- 1 生徒が主体的に学ぶことができる授業
 - 2 生徒が考える場を十分に与え、思考力を育成する授業
 - 3 教科の持つ本質的な魅力によって、学ぶ意欲を生み出す授業

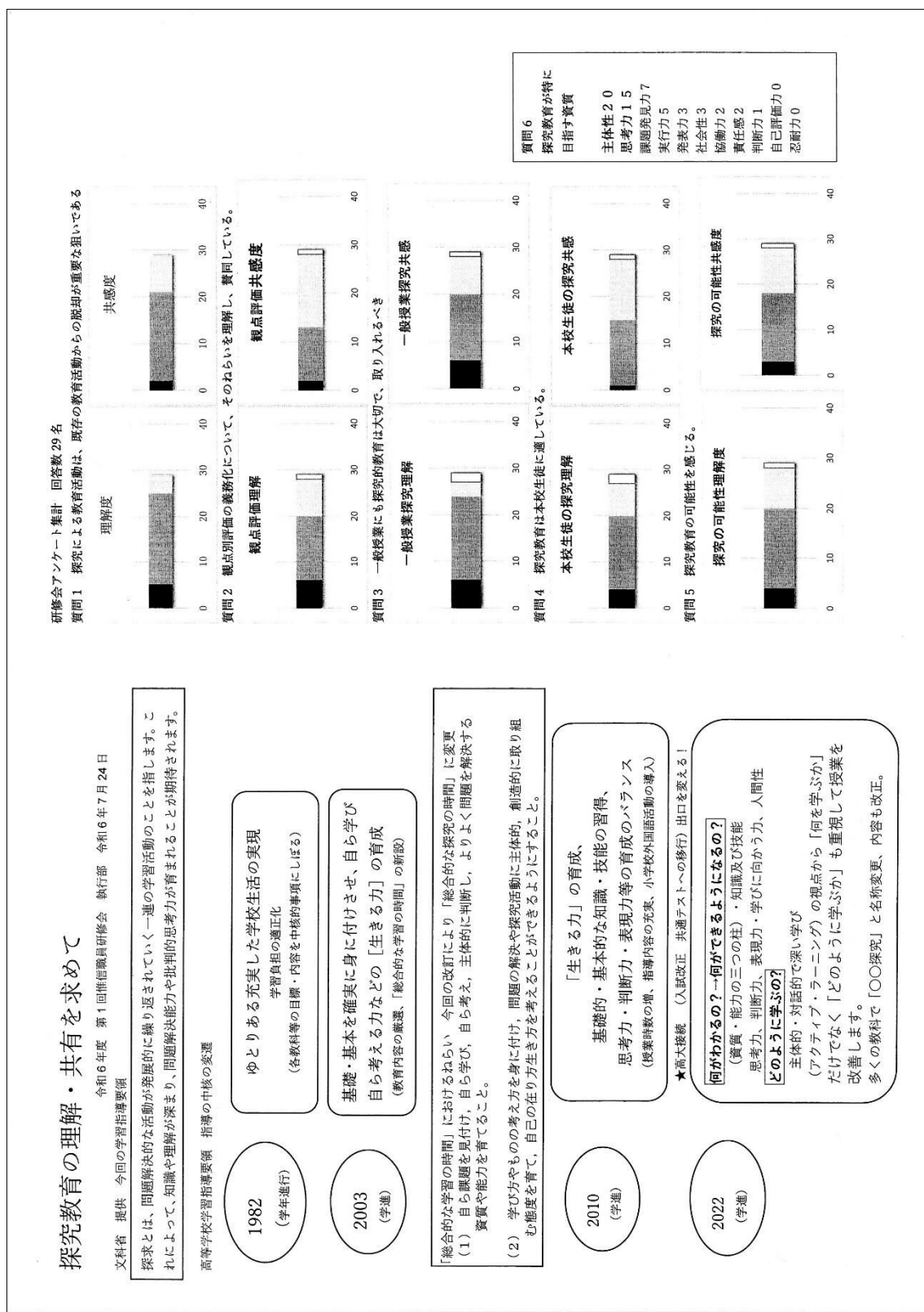
教科	名前	あなただのわらい	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
国語		・生徒が自ら考え、自分の考えを文章化し、他者に伝えられる授業 ・他人任せにせず、自分の意見を言うことができる授業 ・生徒の知識・教養が深まり、学ぶ意欲を感じられる授業	・各単元のはじめと終わりにある程度の量の文章を書かせ、書くことへの抵抗を減らすよう努めた。 ・小説の読解においてグループワークを実施し、自分の考えを他の生徒と共有する活動をおこなった。 ・ペアワークやグループワークを適度におこない、思考力やコミュニケーション能力の向上を図った。	・まずは生徒の実態をつかむところから始めたが、いままで授業内で発言してこなかった生徒が多いと感じた。
国語		・基礎学力の定着を図る授業 ・自分の考えを伝える方法が身につく授業 ・他者との意見交換の中で自分の学びを深められる授業	・漢字学習では、学び直しの観点から小学4年生相当の漢字から始め、基礎学力の定着を図った。 ・年間三回の発表の機会を設け、発表が終わる都度振り返りを行い、改善点を次の発表の機会に生かせるようにした。 ・発問のたびに仲間と話し合う時間を設け、他者の意見と自分の意見を比較しながら学びを深められるようにした。	・生徒は調べてまとめて発表することに対しては慣れてきたが、自分の考えを盛り込むところまでは至らなかった。授業の初めに生徒と「考えを述べる」という目標を確認し、ワークシートにも自分の考えを書けるような工夫を凝らすべきである。
国語		・語彙力を向上させる授業 ・人間関係形成能力を養う授業 ・文章を正しく理解する読解力を育成する授業 ・小説の読解を通して情熱力を高める授業	・毎授業において、プリントやformsを用いて熟語や慣用句を学習する機会を設けた。 ・小説の読解において、グループワークを通して自身の考えを他者と共有する活動を行った。 ・問いに対して答えさせる際には、文章中から根拠を挙げさせることを大切にした。 ・小説の学習後に、感想文や登場人物への意見文を書かせた。	自身の考えを他者に伝えることに対して抵抗をおぼえる者が少なからずおり、グループワークの難しさを感じた。無理を強いることはしたくないが、人間関係を築くうえでお互いの考えを認め合うことは大切な要素であるため、今後も色々工夫をしながらグループでの活動を取り入れていきたい。
国語		・生徒が頭を使う授業 ・生徒が他人を頼る授業 ・生徒が他人を助ける授業 ・生徒が自信を持って発言できる授業	・発問後に相談の時間を取った。 ・発問の際、「答え」だけでなく「そう考える理由」も答えさせるように意識した。 ・選択肢のある発問では、基礎的なものであれば相談の時間を取らずに目を瞑って挙手をさせ、不正解者がいれば相談の時間を取ったりもした。	・復習に時間がかかり、多くの作品に触れられないという点で課題が残る。 ・何度同じ話をしても忘れてくれるので、重要なことは何度でも繰り返し話していく。
国語		・生徒が主体的に文章読解に取り組む授業 ・ICTを有効に活用した授業 ・多角的な視点で物事を捉えられるようになる授業	・ロイロノートを活用し、文章構成を可視化させた ・問いに対して自分なりの解答を導き出しロイロノート状で提出させた ・語彙力定着のために意味調べ小テストで確認 ・映画「コダ 愛いのうた」「空白」をそれぞれマイノリティ・情報メディアの観点に注目させて鑑賞し、感性を養った ・県内唯一のリーディングDXスクールに取り組んでいる学校に授業研修に行った	・来年度ロイロノートが使用できないため、teams Microsoft等を活用した授業の実践に取り組む
国語		・生徒が主体的に取り組む授業 ・生徒に考える時間を十分に与え、意見の共有をする授業 ・情報の取捨選択ができる能力を高める授業	・知識定着のため、作品に関する同じ発問を毎時間して、確認をした。 ・主体的に思考しやすいよう、毎時間前回まで学習した部分までのあらずじを発問を交えて確認した。 ・発問ごとに話し合う時間を設けて、隣同士やグループ内で意見の共有をした。 ・多くの情報の中から自分が必要な情報を短時間で探し出し、まとめる練習をした。	・受験に必要な生徒が多い中で、最後まで学習の姿勢が良い生徒が多かったように感じたが、古典が苦手な生徒が古典を得意とする生徒に頼りすぎる部分もあったため、全員がより主体的に学習に取り組める方法を考えていく。
国語		・生徒自身が自ら考える授業 ・生徒の感性を大切に授業 ・生徒に既存の答えを探させたり、生徒があるはずの答えを待っているのではなく、自ら歩み、自分の意見を持つことを大切にする授業 ・学ぶことに対する責任を持たせる授業	・グループ学習よりも以前の授業へ回帰しつつある ・礼の仕方や指名されたら返事をして起立することなどを約束事として行っている。 ・初読の印象を大切にすため、感じたことや気づいたことを「スケッチ」と称して記載させるなどした。 ・形式段落ごとに大切だと思うところを予習させ、発言させるところから授業を始めた。	・生徒の実態をよく見ながらも、及び腰になっている教育からの転換を図り、生徒への期待を持って、生徒の学びに対する責任感を持たせたい。 ・生徒がわかったと思える授業転換を模索、スモールステップを繰り返しながら、自信を与える授業を行う。 ・新学科においては、手厚い指導を行い、学びへの信頼を持たせる授業を行う。
地歴		・実感できる授業	・為替変動の理解にゲームを取り入れた ・世界の食卓から南北問題を考える ・命の腕輪から軌跡を感じ取る ・SDGs理解のためにビデオ（中村哲）を見た	・為替変動ゲームは生徒に好評であったため今後も利用していきたい。 ・ビデオが思いのほか好評であった。一部の生徒の琴線に触れたようだった。
地歴		・生徒の記憶に残る授業 ・生徒の人生に役立つ授業（問題解決能力、創造力、協働する力など） ・生徒の個性を伸ばせる授業	- 公共：国債の単元で模擬国連を通して各国大使の立場から国際問題の提案をした。憲法100人一首を作成して楽しく憲法を学んだ。 - 地理総合：防災の単元で、防災ゲーム（国土交通省）防災シミュレーション（？）を行った。東日本大震災をテーマにしたシミュレーションでは36人中27人が死んでしまった。	生徒によってモチベーションは様々だった。考えるのが苦手、めんどくさいことが苦手な生徒が多い。そのような生徒でも楽しく、前向きに取り組めるよう様々な事例を学んでいきたい。

教科	名前	あなただのわらい	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
地歴		・情報から考察し、歴史観を形成できるような授業 ・現代社会の諸問題やその背景を歴史から読み解けるような授業	・「歴史総合」：毎時間formsで授業内容を自分の言葉でまとめる ・「世界史探究」：単元シートの使用と単元のまとめ資料の作成 ・「発展世界史」：「SDG s」の項目を世界史の事件や人物と組み合わせ考察する試み	生徒たちが歴史的事実をもとに自分の意見や感想をまとめる行程は、有意義であると感じたため継続していきたい。そのうえでこちらが提示する情報が不十分だった面が反省としてあげられるため、生徒の考察の時間とバランスをとった授業展開を考えていきたい。
地歴		・生徒の読解力、資料を活用する授業	年度末課題を課し、教科書や資料集だけでなく図書館やインターネットを活用してパワーポイントをまとめさせた。 パワーポイントをもとにグループ発表、全体発表を行い、生徒一人一人の課題や仮説、探究内容やパワーポイントのまとめ方を共有した。	探究活動自体は積極的に取り組む生徒から資料を丸写しする生徒もあり、一人一人の作業を指導する難しさを感じた。 本来であれば課題をもとに行うのではなく、授業内で行いたい内容。授業時間数や進度など教員・生徒だけではどうにもできない縛りもあり今後検討していく必要を感じた。
地歴		・生徒が前向きに臨む授業 ・批判的思考力が身につく授業	・「探究シート」による資料読解・調べ学習・グループワークをおこなった。 ・特に教科書に答えが載っていないような疑問点や着眼点を探すことを意識させた。 ・歴史を題材とした映画を鑑賞し、事実との相違点を探った。	・「歴史は暗記科目」という意識を払しょくできなかった。授業の工夫に加え、読解力や思考力が得点に直結するような考查作りをしたい。 ・史的事実と授業内容の面白さを天秤にかけ、教師として迷う部分があった。 ・授業実践のネタは今年度で大きく増やすことができた。 ・自分自身の話術をもっと鍛えたい。
地歴		・生徒が歴史を実感できる授業 ・生徒が歴史の「なぜ？」を考えることができる授業 ・歴史を多面的・多角的な視点で見る力を育てる授業	毎時間「探究シート」に取り組み、歴史への問いを考えさせる活動を行った。また、発展日本史の授業では、史資料を読み取り、比較・検討しながら歴史を多面的・多角的な視点で大観する実践をおこなった。	歴史を実感する授業を行うことがうまくできなかった。どのようにすれば行うことができるか検討していきたい。また、生徒のモチベーションも様々であった。どのようにすれば内発的動機づけができるかを考えていきたい。
地歴		・生徒が考えることができる授業 ・ICTを活用し、考えを共有できる授業	生徒自身が防災に関する知識や関心を持てるよう、ハザードマップ等を活用した。また、防災グッズについても既存の商品や既存の商品を調べたうえで、自分たちなりの防災グッズを考える授業を行い、生徒の防災に関する意識を高めた。	自分自身で考えることやグループで考えることを得意とする生徒と苦手とする生徒で差が大きく、苦手とする生徒たちに対してのフォローが十分ではなかった。そのような生徒に対してどのようにするべきかを考えていきたい。
数学		・生徒が自分の力で問題が解ける授業 ・生徒が分かる授業 ・何のために数学を学ぶのかわかる授業 ・生徒の考える場面が多い授業	・3年生文A、文Bクラスを対象に、共通テスト後から探究活動を行った。探究活動の目的は以下の通り。 ①自分の進路と数学を関連させて探究を行う ②①が問題設定できない生徒は 高校で習った内容について日常に関連していること・世の中で役立っていることは何なのか探究してみよう ③②も無理な生徒は 数学に関連する、自分が楽しく調べられることを探究しよう。 ・受験で数学を使う生徒は受験問題に取り組ませ、それを発表させた。 探究の流れ ・生徒が真似しやすいような「探究の種」を例示した（例 ファッションと数学、音楽と数学 など） ・最終回で発表会を行った。	・特に文系生徒はまだ受験がある生徒もいるため、特に学年末試験以降ただ問題を解かせることに対するモチベーションは相当低くなる。「自習したい・休みたい」と考える生徒がいるのも当然だろう。そのため将来の自分に役立つ探究をしなさい、という点を強調した。 ・文Bの生徒は相当深い内容まで探究できた生徒もあり、教師側としても勉強になる内容であった。「発表会が面白かった」「やってよかった」とかなり好感触だった。 ・文Aの生徒も眠ったりすることもなく、ハイレベルなことに挑戦しようとした生徒もいた。 ・残念ながら文Aの生徒は最後欠席してしまう生徒も多かった。 ・来年度は他教科の先生とも教科横断型の探究活動ができるとありがたい、たぶん他教科の先生も同じような悩みがあると思うので積極的に探究活動をさせたい（数学と理科、その他教科でも、理系なら国語と地歴公民？） ・特に3年文Aの生徒は平素の授業でも探究活動をさせたほうが良いと思う。 ・学年末試験最終日にタブレットを回収したので使えなくなったのが非常に残念だった。可能であれば授業期間中はタブレットを使わせてほしい（今後リースでなくなれば問題なくなるかもしれないが）
数学		・生徒が自分の力で問題が解ける授業 ・生徒が分かる授業 ・何のために数学を学ぶのかわかる授業 ・生徒の考える場面が多い授業	3年文Aの授業（2～3学期） 問題の解き方を説明し、グループを組んで解かせ、授業の最後に小テストを実施した。	・最近読んだ書籍によると、学力が高い生徒が学力が低い生徒に教える「学びあい」はあまり効果がないそうです、むしろ学力が近い生徒同士をグループにしたほうがよいようです。確かに、学力が高い生徒たちならお互いグループを組んで難しい問題についてどうやって解くかを議論させるなど、それぞれの学力にあった学びのほうが個別最適な学びになるような気がします。 教師はグループを組んだ後、一番数学が苦手な生徒の指導に注力すればよいのかもしれませんが。来年実践してみます。
数学		生徒が積極的に参加する授業。 解らないときは互いに教えあう授業。	毎時間ほぼ全員を指名し、1人1問解いて板書。 違っていたら呼んで直させる。	簡単な問題しかできなかった。 レベルを上げられると良い。
数学		生徒の思考が主体的になっている授業	授業の中で生徒が当たり前だと思っているような式変形、公式の活用など、必ず理由を明確に説明できるように指導をした。板書にあえて誤りを書き、解答が終わった後に、実はこの中に間違いがあると伝え、論理の飛躍がある部分や、正しくない式変形などを発見させた。	普段の授業の中ではICTの活用がほとんどない。現状の授業でも生徒は十分に理解していると思うが、さらに理解度を上げたり、興味関心を持たせたりするために、新しい方法にチャレンジしてみたい。そのために数学の授業でいかにICTを活用するかを検討していきたい。

教科	名前	あなたのわらい	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
数学		生徒が考える授業	生徒同士で解法を教えあったり、他の生徒の解法を見ることで考えを深めることができるように問題の解説の前に隣同士で答え合わせをするように心がけた。 教科書で躓きやすい問題をあえて間違えることでどこに問題があったのか誤答分析をした。生徒同士で話し合いをして解答のどこに間違いがあるか考えを深めた。	生徒の解法をもっと授業でピックアップして他の解法に目を向けるような方法を取り入れたい。例えば、生徒に問題を板書させたり、teamsのアプリを使って生徒同士の解法を見ることができるようにするなど工夫をしたい。他者の考えを知ることでの自分の考えがより深まる経験を今後の人生でも活かしてほしい。
数学		生徒が答えの根拠を考えようとする授業	公式や答えをサラッと触れるのではなく、なぜそのような公式や答えにたどり着くのか生徒自身に考えさせたり公式を導き出させたりすることを大切にしたい。	理型の生徒であってもまだまだ自分の力で答えへのだより着き方や公式を導き出すことに戸惑い、手が止まってしまう生徒が多い印象があった。1年次から基礎基本を徹底し、前向きに学習に取り掛かる姿勢を身に付けられるよう精進していきたい。
数学		生徒が考えている授業	各所で、「どうしてこうなると思う?」「これって間違っているけど、どこが違うと思う?」など、生徒がただ聞くだけでなく考えさせるような問いかけを随時行う。	考えることが大事である一方、基礎的な計算や覚えるべき事項も多い。思考することも、それらが土台にあってこそであると考え。授業や自宅学習を通して土台を十二分に築かせる手法を考えていきたい。
数学		基礎・基本が定着する授業	適宜小テストを実施した	計算力の向上
数学		復習の習慣化	前時の復習の小テストを行なった	続けることで復習の利点を体感させ復習を習慣化させたい。
体育		・主体的な活動の中にも、補強・ランニング・基礎基本など、徹底した授業。 ・課題解決に向けての助言。 ・他者や集団との協力。	・女子テニスの授業において、ボールの種類やルール変更をはじめ、シングルス・ダブルスなど、様々な形式で実践することができた。	・ICTの有効活用。
体育		・生徒の主体的な活動により進行する授業 ・自身の課題を明確にし、課題解決に向けて活動する授業 ・他者や集団としての課題に気付き、他者と協力して課題解決に臨むことができる授業	・毎授業の終わりにホワイトボードを使った話し合いや振り返りシートへの記入による思考の言語化、formsアンケートによる学習の振り返り活動をさせ、対話的な学習とした。 ・目指す理想の形を受講生徒と共有することで教師と生徒がともに課題解決の方法を考えながら授業展開することを目指した。	・中堅教諭等資質向上研修で学んだ内容を自分なりに考えて実践することができた。 ・次年度は今年度うまくできなかったことを踏まえ、さらに改善していきたい
体育		【体育】 ・個々のレベルに応じて主体的にスポーツに取り組める授業 ・集団で協力しながら学び合うことができる授業 【保健】 ・知識が明確に定着せずとも、大切さや悲惨さが心に残る授業	【体育】 ・女子サッカーの授業において、習熟度に応じて別々の課題を設定し、取り組ませることができた。 【保健】 ・なるべく実物に触れたり、実体験したりすることを重要視しているが、運転者視点で交通事故の可能性について考えたり、応急手当について実話を映像で紹介したりするといった取り組みをおこなった。	・FormsやOne NoteなどのMicrosoftのツールをはじめ、ICTの活用が図れなかった。
体育		【保健】 ・主体的に話し合いをさせ、様々な意見を取り入れる授業 ・興味関心を引く授業 【体育】 ・種目にあった補強やランニングを行う授業 ・自分たちで助け合い、授業や試合が進行ができる授業	【保健】 ・教員からの一方的な話の授業展開ではなく、生徒が考え自分の意見を発表する機会を増やしたり、身近な例などを提示して興味関心を引く授業を心掛けた。 【体育】 ・選択した種目にあった補強運動等を取り入れることにより、生徒に体のどの部分を使うか意識させることができた。 ・練習や試合がスムーズに進むように考えて動くよう指示をした。	【保健】 ・今年度は時間数が少ないこともあり、深い内容まで教えることができなかった。 ・来年度はグループ活動を取り入れ、全体発表まで行いたい。 【体育】 ・丁寧でわかりやすい説明を心掛ける。
体育		・生徒が健康・安全を考えながら自ら準備体操を行う授業 ・できない生徒をできる生徒がアドバイスする授業 ・ゲームを自ら運営し、進める授業	・体操や補強運動の前に準備運動を自ら必要性を考えて行う声かけをした。 ・その種目の経験値が高い生徒が未熟な生徒にアドバイスをすることによって生徒が自らチームの向上をはかって自ら取り組む姿勢を身につけた。 ・生徒が協力してゲームを進行させ、主体性を磨いた。	・基礎的な知識や技能がため主体的に取り組めない生徒をい。その部分を補う授業を取り入れた授業をしていきたい。
体育		・生徒が安全・健康で主体的に運動に取り組める授業 ・技術の習得やルールの理解を生徒同士で教え合い助け合って進めることができる授業	・グループ学習でアドバイスし合いながら技術練習をした。 ・ゲームの運営を自分たちで進めて行った。	・自身が上手くいった所、他の生徒のいい所に気付くことが出来た。 ・技術の習得のための時間を十分に取れるようにしたい。
理科		・生徒が自分たちで問題を解こうとする授業 ・ICTの有効な活用 ・科学への興味を持たせる授業	・問題演習の時間で生徒は自由に席を立ってもよく、質問しやすい人や物理が得意な人と協力しながら自分たちで問題に取り組むように促した。 ・PCを使って授業を行い、現象の動画やシミュレーションを活用した。 ・1人1回、気になる科学的な内容についてパワーポイントを用いて発表をさせた。	・問題演習の時間に解説を待つだけの生徒は減り、教員も机間巡視の時間を多く持つことができた。しかし、1人で問題を解くよりも時間がかかるので授業の進行との調節が必要。 ・動画やシミュレーションは活用できたが、2学期中間以降、実験の回数が減ってしまった。実際にモノに触れる機会も必要なので、来年度は実験の回数を増やしたい。
理科		・生徒が問題提起と課題解決ができるよう	・どんなささいなことでもなぜ?と問いかけることで、日頃の授業から疑問を持たせることと解決策を考える時間をとった。	・今はこちら側からなぜ?を指定しているので、そのなぜにも生徒が決めるような授業構成を考えていきたい。

教科	名前	あひだのわらい	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
理科		・化学を楽しい、面白いと思ってもらえる授業	・難しいからわからない、できない、つまらないという気持ちにならないように、問題演習の際は段階的に解説していくことを心掛けた。	・生徒同士で教え合いながら問題に取り組む様子も見られ、生徒の姿勢はよかった。 ・生徒が全員自分で解けるのを待っていると授業の進度が遅くなってしまうため、生徒の様子を見ながら進めていきたい。
理科		・生物のしくみについて科学的に理解できる授業	・身近な生物を多く取り上げ、写真など画像を見せイメージがつかめるようにした	・なぜそうなっているのかを各自が思考できるように問いかけなどを工夫したい
理科		・教科書の内容を実生活に結び付ける授業 ・ICTの有効な活用 ・化学的に判断、説明できるようになる授業	・授業では、日常での使用例や具体例を取り入れて説明する。 ・スライドを使用し、実験操作や反応を見せた。 ・実験の手順書を作らせた。	・生徒自身に実験の手順書を作成させることで、多くの生徒に必要な器具や操作の注意点に気付かせることができた。しかし一部の生徒は書き写すだけになってしまい身についていなかった。 ・来年度はお互いに発表するなど主体的に取り組む機会を作りたい。
英語		・他者を尊重し、自分の考えを他者に適切に伝えることができる授業 ・授業の教材を通して、疑問を持ったり考えを深めたり新鮮な発見ができる授業	・SDGsの目標の種類を知り、環境問題について興味を持つ機会になるように話題を提供し、各自の意見や実践した例をまとめた。グループで発表する機会を作り、意見を共有する。 ・音読練習、基本的文法事項の復習	基礎学力の定着を図りたい。繰り返し読んだり書いたり、反復練習する地味な作業を侮らない。
英語		・生徒が主体的に学ぶことができる授業 ・生徒が考える場を十分に与え、思考力を育成する授業 ・教科の持つ本質的な魅力に依って、学ぶ意欲を生み出す授業	・生徒が主体的に学ぶことができる授業 「犬の文化を理解する」という擬似異文化理解を想定している単元を取り扱った。この話題が生徒にとってさらに身近に感じられるように、特に授業の導入を工夫することで、生徒が主体的に学ぶようにした。考査後に行ったアンケートの結果から、比較的多くの生徒が本単元の学習が有益であったことが読み取れた。 ・生徒が考える場を十分に与え、思考力を育成する授業 「ペットとして飼っている犬の癖に困っている飼い主に助言する」というタスクを作成して、教科書で読解した内容が英語を用いた発信につながるように計画した。しかし、指導時間を十分確保することができなかったこともあり、生徒の思考力を育成する授業としては課題が残る結果になってしまった。 ・教科の持つ本質的な魅力によって、学ぶ意欲を生み出す授業 最後の授業では、生徒3人から4人一組で図書館のラウンドテーブルを囲んで英会話を行なった。最初の質問はこちらが用意したが、全て卒業後の新生活に関わるものにしたことで、生徒は前向きに考えて、明るい表情で回答することができた。途中からは生徒どうしによる自由対話を促し、生徒の自主性を尊重した。自分の言いたいことがうまく表現できないものかしさを覚える生徒もいたが、それも含めて語学の魅力であることを伝えたかった。	・「思考・判断・表現」を重視しながらも、それを下支える「知識・技能」の指導と練習をいかに実践していくかを考えていきたい。 ・「知識・技能」の習熟には家庭学習が不可欠であるが、多くの本校生にとって家庭学習は習慣化されていない。 ・この課題を解決するためのICTの効果的な利用について考えていきたい。
英語		生徒を積極的に学びに向かわせる 生徒の自ら学びに向かう姿勢を醸成する	タブレットを用いた単語学習、音読学習 授業内ではないが一年間通して、家庭学習用の「自学ノート」を作成させ、毎週提出を求めた。提出は任意としたが積極的に提出してくれた生徒も多く、2冊目に入ったり、中には5冊以上ノートを進めた生徒もいた。	本校ではどのように家庭学習時間を確保させるかが長年の課題である。そこで本年度は「自学ノート」の取り組みを試みた。提出は任意としたが、家庭での学習の重要性を授業内でも話したところ、思いのほか提出をしてくれたように感じる。しかしながら、家庭学習の身中はただ単語を書き写しているだけといったようなものが多かった。次年度以降はより自学の中身の部分について生徒に求めていきたい。
英語		本校の生徒は、学びに向かう姿勢を育む必要がある。 そこで、 ・生徒が前向きな授業 ・様々な意見が飛び交う授業 ・上位から下位までどの生徒も学びがある授業 ・実生活で役立つ学びを得られる授業 ・ICTの有効な活用 をテーマとして、授業実践に取り組んだ。	・毎時間、すべての講座で、タブレットを活用できた。 ・文字の入力（チェック含む） ・パラフレーズ（添削） ・課題英作文（添削）（習熟度対応） ・音読活動と音読指導（添削） ・共有ノート機能による授業の振り返り ・調べ学習と英作文、スピーキング活動（添削含む）	・今年度で、ICT指導力をレベルアップできた。 ・今年度は、文レベルでの作文力育成という点では課題が残った。（ただ、そもそも単語レベルでの実力養成が必要な生徒が多いが。） ・来年度は、シンガポール研修旅行とマッチするような活動を提案していきたい。
英語		・英語学習に対するエンゲージメントの向上 ・既習内容を活用した思考力の育成 ・生徒のパフォーマンスに応じたFBの充実	・ほぼ毎時間Quizletや音読メーターを使いながら、生徒が楽しく集中して学習しやすい環境作りを行った。 ・Small TalkやWord Quizにおける生徒の発言に対して、発問を入れながらより適切かつ正しい表現を提示し、その後の練習を行った。	今年度は、ICTの良さを有効活用し、生徒のパフォーマンスの共有やゲーム性を高めた反復学習を十分に行うことができ、学習効果がある程度高まったように感じた。一方で、自らが発する英語を、調べて取り入れた表現というのもあり発言できない様子が多く見られた。自分の言いたいことをまとめ、生きた英語として話すには、音読を中心とした練習が不可欠であり、そのような基本的な練習が一年次から圧倒的に不足している。言いたいことを、適切な表現と話し方で、流暢に話すことができるようになる指導を目指したい。

教科	名前	あひだのわらわ	3学期の実践・今年度の取り組み	今後の展望
英語		・見て、聞いて、言って、書いて、脳の様々な領域を使って定着させる授業を展開している。	・今年度1～3年、すべての学年授業を担当した。 中でも、3年論理表現では、表現のための基本知識の習得とライティング活動を重視して行った。 定期考査では50語以上の英作文問題を毎回出題し、まとまりのある文章を英語で表現できる力を養うよう努めた。	来年度、自身は中堅資質向上研修にあたる。現在のところ、指導と評価の一体化について研究したいと思っている。学習指導要領や本校英語科が定めるCAN-DOリストに基づいて、指導法や評価法の深化に努めていきたい。
英語		担当学年【3年】 担当科目【英語コミュニケーションⅢ、発展英語】 ①生徒が主体的に参加するため、授業の中で生徒が自らの意思で扱う内容を選択する機会を充実する。 ②（今年度は）即興で「話すこと（やり取り）」の領域の育成を重点的に行う。	①生徒の話すテーマは、複数のテーマから生徒自らが選択して活動を行うことを意識した。テーマ一覧を事前に渡し、生徒の関心、その時の気分によって題材を選択できるように留意した。 ②スモールトーク（2人）、ディスカッション（3人）、ディベート（3人vs3人）と段階的にやり取りのレベルを上げた。 ディベートについては準備も含め全6時間で行った。テーマは「動物園の是非」。事前調査型ディベートを行い、「ディベートとは」→「日本語ディベート練習」→「テーマ事前調査」→「主張作成」→「反駁練習」→「模擬ディベート」→「本番」の順に行った。実施時期が入試シーズンであったため、欠席で準備が不十分のまま本番を迎える生徒があり、その部分のやり取りの滞りがあった。十分に準備した生徒においては、相手の主張や反論に対して、弾力的に対応しており、一定の成果があった。今回は3年生の文B、理型が対象であったが、他学年、別類型でも行えるように改良していきたい。	・今年度は即興で「話すこと（やり取り）」の領域の育成を重点的に行った。担当学年への指導が1年間のみだったため、3年間の系統だった指導は行えなかったが、1～2年次における先生方の指導の上積みがあり、英語でのやり取りに慣れており、活動は円滑に行えた。 ただ、その一方で「知識・技能」と「思考・判断・表現」のバランスが難しかった。英語を使う活動が多くなる中で、着実に「知識・技能」が定着するように授業をデザインしていく必要がある。 惟信高校英語科として、評価（3観点）方法の共通認識やCAN-DOリストの検討・協議、それを踏まえた指導方法の確立を目指したい。そのために教科内での情報交換を密に行う必要がある。
英語		・生徒が興味・関心を持って授業に取り組むことができるような展開の工夫 ・ICTの有効活用	・生徒にとって身近な話題と授業内容を結び付けけるような導入を工夫することができた。内容の展開の仕方は1年を通して同じ形のものを用いて進めたが、声掛けの工夫や、いつもとは異なる方向からの興味の持たせ方を取り入れて、今後は改良していきたい。 ・Quizletを用いた英単語のゲームではチームごとに話し合いながら何度も行うことで、単語の定着を図ることができた。	・授業内での生徒の「話す」活動があまりとれなかったと感じるため、機会を増やしていきたい。 ・もっと場面設定などを明確にして、プレゼンテーションや発表の仕方を工夫していきたい。
英語		将来、本当に必要と感じた時に、自分で学習が続けられるよう英語の読み方の基礎と、聞かれたことに何とか答える姿勢を育む授業を目指す。	プロジェクトを使って、各レッスンの話題に興味を持たせるような映像を見せたり、英文読解の説明を効果的に行ったりした。 また、英語で聞かれたことを英語で答えさせるタスクを1年間継続して課し、「読むこと」と「書くこと」でのコミュニケーション能力の育成を図った。	「読む力」と「書く力」の育成が「聞く力」「話す力」の育成につながるはずであるが、「聞く」「話す」については訓練が不十分であった。
英語		○生徒が英語に対してモチベーションが上がる主体的に学ぶことの楽しさを感じることができる授業 ○生徒が自分の頭で考える時間を多く作ってフランクに表現できる機会を多く持つ授業	・自分の好きな国や住みたい国を調べてその国の制度や税金などを日本と比較してプレゼンテーションを作製 ・自分が行きたい国の観光パンフレットを作成して、その国の魅力を英語で発表 ・私が旅行した国の動画を作成して海外の様子を説明した。	・実際空港や税関や海外のレストランなどに役立つ英会話に生徒たちはとても興味を持って多くの生徒たちは海外へ行くことのモチベーションが上がった。 ・コミュや論表ではできない英語の楽しさを少しでもシェアできたと思う
英語		○生徒が主体的に学ぶ意欲が持てる授業 ○生徒が自分の思いを表現しようとする姿勢を育成する授業	・毎時間の始めに小テストを実施。教科書の重要事項や大事な文法事項の学習を促した。 ・1 minute talkingと称して、毎時間異なった話題を提供に1分間、あいづちを打ったり、より詳しく質問できることを目標とした。	・小テストにおいては、大変効果的だった。学習事項が限定的であったため、取り組みやすかった。何度も音読したり、書いたりして取り組める生徒ができた。 ・1 minute talkingについては、決まった型に沿って会話をするには取り組み、相手の応えに反応することは上手であるが、より深く質問を重ねたりすることが苦手である。質問をしようにも、文の構成がわからないのでなかなか質問できなかった。そのため、文法事項の定着に向けて繰り返し学習させていくことが課題である。
美術		・生徒が主体的に考え、作品を制作すること促すような授業 ・生徒同士が作品を評価し合い、お互いに高め合えるようにする	・毎時間授業の開始5分間でスケッチを行い、絵が苦手な生徒も、絵を描くことに対する抵抗感を減らすように促した。	・来年度は、生徒が自分自身の制作を振り返る時間を多く取りたい。
家庭		・授業内容と自分の生活が結びつく授業 ・仲間と協力し、物事を進められるようにする	・高齢社会の単元で、グループワークをした。大きなテーマは具体的に示し、その中で興味を持つものを各班で学習させるようにした。	・単元によっては、身近な話題として興味関心をもつことが難しいものもある。そのような単元でグループワークを取り入れたところ、自分たちで考えようとする姿が見られた。
情報		・パソコンに苦手意識を持たない授業 ・情報の授業で付けたスキルを、他教科でも活かせる授業 ・情報モラル学び、実生活に役立つ知識を身に着ける	・ゲーム感覚のアプリケーションを使い、基本となるタイピングの速度アップを図った ・情報を取捨選択する力を養い、パソコンを使っていままとめられるよう、技術力を磨いた。	・個人のスキルの差が大きく、実習の進度に大きく差が出てしまう。 ・実習に時間がかかり、教科書の内容が浅く終わってしまった単元があった。



48

惟信探究 3年9月 総合的な探究の時間 組 番

小・中・高12年間、長く学校に通ってきました。君たちのここまで人生・成長は学校生活が中心でした。あと半年余り、皆それぞれ新しい道に旅立っていきます。新しい道のりの中で大きく進むのは、自分の考えで道を選んで、自分の意思で進んでいく行動が起るといことです。これまで様々なことを学んできたが君たちにとって役立つものであるでしょう。今後の人生でよりよく成長するため、豊かに生きるため、「学び」とうまく付き合っていくことはとても大切です。

最後の探究活動は、その「学び」を探究します。

12年間の仕上げに今一度「学び」と向き合おう。

学びの探究

テーマ1 探究って何?! 今更だけど探究活動の本質を再確認しよう。

下の表は、「企業が学生に求める資質、能力、知識」について経団連が実施した調査の上位の回答を抜粋したものです。文系、理系共に、第1位「○○○」が圧倒的にトップとなっています。このベスト3は、文理共に同じですが、実はこの3つの要素こそが「探究活動」で成長を目指す重要な資質・能力です。特にこの1位の資質は社会で生き抜く最大となります。さてベスト3は何でしょう。ちなみに上位にランクされている協調性や社会性も探究活動で養うべき大切な資質です。

【1】企業が学生に求める資質、能力、知識（上位の回答を抜粋）



*調査対象は上位5つの業種（製造業、情報通信業、電気・機械・金属・化学・石油・ガス）による集計。1位=5点、2位=4点、3位=3点、4位=2点、5位=1点。行った場所／一般社団法人 日本経済団体連合会「高度人材育成に関するアンケート」2018年4月

記入 第1位 () 第2位 () 第3位 ()

「探究」は、高校でも大学でも、今の教育界で、将来を担う人材育成に最も重要とされている活動です。「自ら課題を見つけ、自ら考え、自ら行動する。」←「総合的な探究の時間」の元である「総合的な学習の時間」が、平成の初めに実施された時から、この取組で生徒が目指すべきメインテーマです。残った高校の時間、将来の自分に期待して、探究活動に生徒全員で積極的に取り組んでください。

探究活動 最終章 学びの探究

良い「学び」は、真理との付き合い方を選んでくれる。

この世の中は、愛すべき真理に溢れています。太陽、星、大地、空、海、大気、様々な生物、色とりどりの植物・家畜、火や水、光、熱、電気、美しい風景や調音、民族、歴史、身体、心、生命……人はこの真理を見つけ、融合することで現在の文明文化を発展させてきました。

「学び」は真理の入り口に我々を導いてくれ、その融合の方法を手解きしてくれる。同じ「学び」こそ、我々の人生を充実させ、豊かにしてくれる礎である。真理との融合が、生きる世界を信じ、自分を信じる力となる。君も世の中を、未来を展望させる良き「学び人」となりましょう。この機会に、学校の日々の授業や学習との向き合い方も考えてください。

ワークあなたはどの教科・科目に最も興味関心が深いですか？

① 国語 ② 数学 ③ 英語 理科 (④物理・⑤化学・⑥生物・⑦地学)
 社会 (⑧地理・⑨歴史・⑩公民)
 実技 (⑪音楽・⑫美術・⑬体育・⑭家庭科・⑮情報)

記入 番号

「学び」の探究活動のきっかけとします。生まれてからここまでを振り返って

ワークあなたがその教科で最も印象深い「学び」、感動した「学び」の体験は？

「学び」の内容 (他の人に伝わるようにできる限りわかりやすく具体的に書いてください)

そのR・理由

次回この内容を中間に発表してもらいます。各自の発表が今後の探究活動の基になる可能性があり。特に立派なこと、かついいことを書く必要はありません。本当のことを素直に丁寧に書いてください。探究活動は行動自体に価値があります。自分のため、周りの仲間のため、誰かに取り組んでください。

市内の食や奇祭 惟信高生が紹介

校内マルシェで住民に



来場者々に市内の企業の商品の魅力を説明する生徒＝港区の惟信高で

惟信高(港区)の生徒が、市内の名物や名所を伝える催し「惟信マルシェ」が同校であり、1年かけて調べた魅力を近隣住民らに紹介した。

生徒が主体的に考え、行動する力を育む探究活動の授業の一環。1年生は、学校がある港区を中心に、居住地域の飲食店や祭事などをグループに分かれて調査し、訪問取材した成果を3枚のポスターにまとめた。2年生は「未来への主張」を考えた。

このうち、戸田川緑地公園(同区)や七所社(中村区)の奇祭「きねこさ祭」などを取り上げた1年生の7グループは校庭で発表。事業者らの協力も得て、商品の販売などもした。

ラムネ菓子などを製造するカクタイ製菓(西区)を取り上げたグループは、製造過程を写真付きでまとめ、人気商品も販売。濱野双葉さん(16)は「地元の宝なので紹介できて良かった」と話した。

(大野沙羅)

愛知県立惟信高等学校

令和6年度 創立100周年スローガン



伝統を超えろ

~Toward the 100th Anniversary~

地域とともに歩み、グローバルリーダーの育成をめざします



やっやがや!
惟信

〒455-0823

愛知県名古屋市港区惟信町2丁目262番地

電話番号 052-382-1355

FAX 052-384-4606

H P <https://ishin-hs.jp/>